



芭蕉翁附合集評註 下

^ 5  
1060  
2





芭蕉翁附合集評注下卷

名月のもやう ぼふ 匠 一 何ひ

一分でもなだ 梨の 切物

玉味噌の 位流 小かき 秋は 風

ぼふかき 一 何ふと ぼふ 一分でもなだと 何

しらひ ちまぐく 小らひ あふまぐく をつけさ

る あり 後の 白うら を 將どく 旅神と

玉味噌の 位流と 枕詞の やうに いひつける

まふち 依 稽あり 附ごる ぶの り 面あり

熟べきり

付合

け宿をまめいて通る館の欲  
ま田うゆりて夕ま此凡  
平目なる石を委くる川水場

たドめ此向成町ハづ此の家と見くる附合  
なり後の向もまごよ田家此やうさと見て  
風号切河原あどつふものもたうく井戸端  
ふく川水まごころやまきま  
ままといハ次皿もゆるル里  
小よつと於日小むり小横せ  
お向にぬけまといひう、親足才小もか

くぬけ出る時ひそらふ跡用の金たのど盛をり  
何里よりらぬりあれどままといハ人もゆる  
まごりありおなるりくりおたやくあま  
あり後向ハまごよ小家をもぬけおく旅干  
かりたるまま

四五人通る僧もま  
新通町の子ども乃能智古能

お向春乃日此もまなる小四人連の是  
法沙のううゆくふをあらんの町と見く  
廿抄の能も通てたうんの子ども能乃

替古まゝるはまぢつけくる之を彩るるよこ  
とバのまこしめぢましりれど下小能といふ  
てきさしたる備ありあはらのつけごろ  
ふりく教味きんし春色目前

ツボ子  
泪の里下してハ泪ぐみ  
塗たにおすりおの出し入ル

お向ハ赤房の親乃もとよ来くまづうへ乃  
うたことももかくり出くつが家のなつし  
け小涙ぐむやうさあり後句塗くおおハ  
赤房の手及具あるべしおの塗やう藤

徳のやうまなどめあれさうつらく古風の  
たぐるまゝこしゆまづうへまゝ人の及具こ  
かのおおすりえつくのものおしりくもの  
がくりまゝるはま意味さうれおあふ手たま  
何となき向のやうあれどふりく心を弄ひ  
たるつけ合ありふりく心を弄くべし  
有暇の七ツ起ある茶碗に

ひさご乃れをつけわくたり  
然とく起出くひれごふれつける老人な  
どの風情あらむり



たぐはくやきく 出る 髪なゆ

なりた附合なりお向病人の向ふか  
ら白をかりおまふふあわりのをうけま  
なり後向ハ髪なゆひのひろくはやくて  
ゆるやくまお小ハ病人ゆるを志ゆる  
との附合なり

冬ふの縁ふもの思ひます

けハへどもよそへども 君かつりこず

お向らの附向お向らで 往りつらりたをた  
かと思ひの意をよくの づるものこふとを

見初くよりかちよま ぎ意とハ志りあがら

まうつよもわまき小ぞあぐる 小冬ふの目思

ひかけぞもたどめく 出ほひものひたる縁

よりあゆく 思びがこまお思ひよなる

ちまはきどもとよりうこめひまくいろく

とけいひのそへども 君ハ志らぬ髪ふつ小あまこ

あろなるをうららめく ことおねハ志る小意

の向よなるりこつらゆむべなり意向といへ

たいづれもく たぐあらだ人意の及ぶお

小阿らびすづく 意向ハ志りのねりふく心

をつくぞたると

田の稲をよほらば月夜

風ひえろむる牛の子乃旅

附合たぐろの垣ふろく牛の子をまき

他國へ去るゆへにま建たのよきごと

死むハ人の何ふたのよき

神風や吹起けぬかいつえぬ

あふ二白ともをぬやて常人のいひ出づき

つよあはらばお向人の死るよとてうけぬ

つまでも生さばあさましくむむむむむ

をろこふもちくたもてよハも一人の北るより

なたものあらば何よりたのべたし清純のよ

べくる人ハ世十よたらで死むこそめやそら

死きと兼好もいつり命長きハ死なるとも

いひくともよく人のちくせむのりを解る

及ん者のあふちあり後向又斎好のつけ

合うく係乃翁のたを解るうけ松ありた

不ようその人死むハ人のといへばお向あらば

釋教志懐乃たぐひをとそ思ひゆるべきを

神風やとハたきるまはむとて附合も社理

あらむにけりぬ。人の砂風ふ吹おこさぬく  
かひ是くは時かきぬる。ゆにまくりこる  
きはくもも何らだふ<sup>ツカ</sup>の<sup>ヒ</sup>後<sup>キ</sup>な水どく  
こゝ何らば。

十六音もたあり。名ふ小ゆりり  
あゝるをかくま。おき夏の秋

お向ハ名月の歌も十六音もまりりくく  
ド名ふよかつりく月を見ーとつゆり  
後向ハ商人のあつらひを小利成むさぐ。心を  
かくーくきとまきこゆれどはよハ何らド心

何の抽き夏の木のがえさるるをかくーくりり  
とつぬれおきとありくおよといふあるな  
らむらけもいまどおぐやうたらぬぬふけみ  
ちのたをよとよべーとまけくま水その名

おふくくものたどき人に見るこー  
おふり拂ふともの松明

五月まで小神のわくもぬき何  
けきもゆりあう海ドや

不皿なうらふ火深え巻く  
年まひとり日結つてむ執



いらなる 附向あらむはうりがく  
波ハかきみの 海士を 勤りさ  
空々 呼く 汝平あがらた いう 能

お向波よ 海士の うつりく かきあ の 氣のう  
ごくとつふ 向後 向は 干貝の 家ふ いう 能をさ  
ゆ 浦をこの 家

城小の 初雪を 吹く 意ぬぎく  
おまきく 火を 吹 障つ さが 妻  
お向ハ 家ふ かつりく 意をぬげバ 城北の 初  
雪を 吹く 之後 向ハ 城を のりきく 曉

此まごこをくくくいひのぞくめ

黒木子さて 登る 谷かげの小屋

注が 坂と 身を やまうを む お思ひ

赤身はくくも いらむ 注妻と ちりて 心を  
やまうを む 志ど お思ひ ぬる 谷かげの 小屋は  
初まきさき 氣ハ 黒木と とも 子さやう いら  
むを けり かりぬ 登き 娘とら

水の いやや 小 佛 ささきみく

赤る 志まを 注 傍の 涌 河は 焚うへり  
ろの 何く めれり せ

知算入ふ糸妻夫もたのが名を替て

意に古風乃 殊る 夏 心解

糸妻夫が知算入ふたのが名を替るを要人篇  
のよふりと思ふにげよもみちのくわごりまぞ

古風の意ハ何のべき

開ひらきをううるるてて 殊ニッの子

け里ふもちつてへたる 布 袴ハカマ

まごへた附合あらどをう ぎふちもちつて  
へたる布袴むり 何げーを昂が思ふ解ま  
らむ

おふしハ塩屋まごも夫おもらひ  
おりのちハ いらぬ 妻は

け浦小名言たをいふく いうもゆゑ何の  
の海ふれなるならむとハ見ゆれどたごいつりめ  
ねどく世をもて何そびぬるあれが名をとよ  
べくも何らだおしハ塩屋まごも来ておも  
らふをこと後向ふくハかのをことれものかめ  
さるはさけハ古まのどもゆくこええてかる  
めれどおりの後ハ早もーらだどりよに  
けてこそおふものおもらひあれとつけ



いふ御舎あらむうはこれのれが強<sup>ミヒ</sup>作<sup>ドク</sup>や

赤さがしをちぶつるま柳

花さけり<sup>ミツカ</sup>柳が舞<sup>ミ</sup>成かこみよて

前句のころるい里の子乃赤がしをちぶつる柳の

舞のまがごふとりありかくつけるまの

尺ゆ舞う舞あらばの<sup>ミ</sup>花の<sup>ミ</sup>後<sup>ミ</sup>合<sup>ミ</sup>乃

花り

花り

ほつけく餅くふなどのま<sup>ミ</sup>枕

なでくこりい<sup>ミ</sup>は草乃引たご

赤白の家小何れが<sup>ミ</sup>小もる飯を<sup>ミ</sup>旅中<sup>ミ</sup>の<sup>ミ</sup>枕

の<sup>ミ</sup>葉<sup>ミ</sup>小もるといへる<sup>ミ</sup>舞の<sup>ミ</sup>ころ<sup>ミ</sup>飯<sup>ミ</sup>あ<sup>ミ</sup>み<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>餅<sup>ミ</sup>小

境<sup>ミ</sup>つ<sup>ミ</sup>け<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>ら<sup>ミ</sup>あ<sup>ミ</sup>ん<sup>ミ</sup>ど<sup>ミ</sup>の<sup>ミ</sup>旅<sup>ミ</sup>と<sup>ミ</sup>ふ<sup>ミ</sup>と<sup>ミ</sup>ろ<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>け<sup>ミ</sup>て<sup>ミ</sup>な

ほ<sup>ミ</sup>旅<sup>ミ</sup>の<sup>ミ</sup>ま<sup>ミ</sup>が<sup>ミ</sup>の<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>い<sup>ミ</sup>ひ<sup>ミ</sup>で<sup>ミ</sup>け<sup>ミ</sup>り

やけ<sup>ミ</sup>た<sup>ミ</sup>ま<sup>ミ</sup>小<sup>ミ</sup>い<sup>ミ</sup>る<sup>ミ</sup>舞<sup>ミ</sup>子

一<sup>ミ</sup>村<sup>ミ</sup>の<sup>ミ</sup>藩<sup>ミ</sup>園<sup>ミ</sup>に<sup>ミ</sup>君<sup>ミ</sup>が<sup>ミ</sup>れ<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>舞<sup>ミ</sup>く

お<sup>ミ</sup>白<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>衣<sup>ミ</sup>の<sup>ミ</sup>よ<sup>ミ</sup>び<sup>ミ</sup>出<sup>ミ</sup>と<sup>ミ</sup>見<sup>ミ</sup>て<sup>ミ</sup>衣<sup>ミ</sup>成<sup>ミ</sup>つ<sup>ミ</sup>け<sup>ミ</sup>る<sup>ミ</sup>ま

れ<sup>ミ</sup>も<sup>ミ</sup>公<sup>ミ</sup>卿<sup>ミ</sup>乃<sup>ミ</sup>何<sup>ミ</sup>の<sup>ミ</sup>衣<sup>ミ</sup>白<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>れ<sup>ミ</sup>が<sup>ミ</sup>も<sup>ミ</sup>つ<sup>ミ</sup>づ<sup>ミ</sup>ま<sup>ミ</sup>まで<sup>ミ</sup>よ

た<sup>ミ</sup>白<sup>ミ</sup>な<sup>ミ</sup>り<sup>ミ</sup>い<sup>ミ</sup>つ<sup>ミ</sup>お<sup>ミ</sup>乃<sup>ミ</sup>藩<sup>ミ</sup>園<sup>ミ</sup>の<sup>ミ</sup>上<sup>ミ</sup>小<sup>ミ</sup>そ<sup>ミ</sup>つ<sup>ミ</sup>と<sup>ミ</sup>れ<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>舞

た<sup>ミ</sup>る<sup>ミ</sup>ま<sup>ミ</sup>が<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>え<sup>ミ</sup>も<sup>ミ</sup>い<sup>ミ</sup>り<sup>ミ</sup>だ<sup>ミ</sup>艶<sup>ミ</sup>ある<sup>ミ</sup>い<sup>ミ</sup>つ<sup>ミ</sup>に<sup>ミ</sup>お<sup>ミ</sup>白

の梅子にたるとなるころと

たさ乃家と見えたるちよの下

細き井 溝をのびるも館

ささえたる体乃春と

のころちよらさ 伊丹 洗白

琉球小燈籠 ぶさの 表がへ

庭千件丹徳白のちよさをさえてのころ

たつらさるゝ必定家とらさく産ぬく

の表がへさるゝさほをつけり

見しつられて込付たつりし本音のさ

娘入さるゝよりたや 鳴子川

本音のささ見しつらるゝ人位娘入さるゝよ

ま鳴子川徳家なるべしさをさく附合か

くのあくよくあ句の位をささむべし

草赤ま百石たれ門がぬく

ころり小負とほさふらの坊方

ささくまお句の人ぐさるゝべし句を解を

整に及ばさ

干おつさるゝ糖色のぬ

と拭のまざぬくらんをささるゝのり

赤白つねのふなれど後白れの水が積色をさ  
らぐ干抱つけたるはねるよあらば詠花  
たゞの物と見えてつけたるはては拭きゆか  
屋の風名よりまぎれざるをいひつゝのたよ

恙者どもの詠連ちのよべー

細干支場をせ鳥のそなれぬ

編 へえ 従子 入る 何ゆを

公前の向ちれどけのそなれぬ

のし、お 穂乃 かつま 草 畑

糸の子がは恋あふ 秋乃 風

くどりれど公前のそなれぬかへきくもめでた

まをよつとくき奇ならげるあし一のくお穂

とよお向小佳り恵の向を思ひつらむきれは

のふといふよて場ふよくかたふひこめ

手 伝りの 酒乃 幸もも 付ふら重

目もらと音と 見ぬ 鷲馬の市

古 洞 之 跡 兼

持えを旅のぬしおおくれ

赤をさくちふら名取君ハ志くらげや

お白たぐ人ならぬ人の思へるこの何め



うたれくかへる中の戸ははら

意を引むとまれば吹ありとをうた

白なる夜やけくち何がりたる心の意

とまふたこらき妙とたぐはるゆゑに

かへるらふをうこを附くり

火をたけはるの洞ももみごもり

ふも羊ふみ 跡き 昭 弘

何れのまへに

お山のとたるいまのぬき

入ると何まりよのめはたは奥

お向うにも古風あるふと見くこのとハ

つげたるならぬ境向のころハ中くふ人里

ゆくちありふりり何まりよ山の奥を暮ねて

といふ身寄のころあり

瓢箪ヒョウタンの大け五石だくりた重

風ふふくれく 海老糸市人

何れも虫トビのハは是トビ利トビの地

五石だくりも入るべき瓢箪を糸の重

おと見かつ瓢ヒョウタン風ふふりくと何らひ

たるこのちの白ハたぐ糸人といふより



安の市を思ひよをたりも安八からんたの  
 みやとありらづぐも海に都の無念善き  
 は地へ人情<sup>ナゲ</sup>難<sup>ガク</sup>うく名利のふくつ  
 らりーはもの之長安の無念善付おれや  
 見ゆ

醫のね不たころ目ぐるやれ

いろぐとゆきのやふたち出く  
 おのれも殺西を業とさるものくらまこと  
 醫乃たるたころ自ぐるやれいそくと  
 砂をのやふたち出はむべく

ひとりせやくさの ねえ

け里ふ古きをさる乃名をつく

里もたどらるものむり代く回く名  
 をつけるより世おれく何よりなり里ふて  
 人ふまられたれおるい流へ頼ゆさののいま  
 どもせやくとの附ごらるや

そ結たりをぬあ乃何けがの

きぬぐや何まりうぶそく何てやうふ  
 むの何んがれもそ結たりをぬつ小を五びて  
 かふる人と具くきぬぐとつけるき

かがそくほてちうたらむハわりたふるべ  
 風ひそあふま年のうつくし  
 ちもつらむはまのは膳もさぐりまぬ  
 風のきてるもまきまぬなるべ  
 ぐふろのよりをつけたる一辨え  
 抱いろくはれた船旅なめりり  
 月と花はさらの意も松をよす  
 まれもそのふと  
 破れさぬ新寺付る春の末  
 見えハ淋しきあまの袂よりり

破れさぬといふを農家の内まを  
 ちのまふふりたくるち  
 家ちかくて服袖ふつむ十寸後  
 きの思ひあふる神子の抱ひひ  
 きいめくうたふる附ぞろといふのハち  
 まどねなるけろくゆき白之十寸後の  
 家なれた神子の抱思ひあふる  
 人ちくいまぐれ産の白ひる  
 幼瀬ふさもる孝乃片隅  
 ちれハ二句とも源氏物語の面影なり

ほろぎら草の何れもこれ中々  
垣種のはげげ 遠くこがねく

こきらもかのよひひびたよそたぐら  
をつけりともみえぬが又あくよくつきてえ  
もいだちやー 草の何れもこれ中々  
たくふけてほろぎらもあくらむ垣のち  
げのちめもあらむ

あやにくみわづらよ妹が夕あぢめ

あのをいたゞ 泪つゝむづ

あやのくみわづらよ妹が夕あぢめ

け向ちのどまへにゆくものよさらよあらだゆい  
はきささぐさるいりこのほやたくの共た不  
けなだんを思ひゆく及びぬ意たのより成  
まゆつと思ひきさるのちあらだやを思ふに  
かあやと山を見ていなげくあつてーとて  
お思ふ人の夕あぢめさるもの之後向や  
泪なつむといふねもーろたはくつげら  
まぐさるの人なつけるあや

月ツキのくハ乃ノさめく清スミさふ  
石イシもまぢくマ鞍イ小コ居イぬヌづり

けつし句ぬほく敬味きべー消けんと  
いつる小居ぬぶめとひびくをたるとあふそのめ  
をいむとをなふに吐くくつゆのめさうだ  
秋の田をからきぬるのめさうだ  
けつくあがらふ字のよまある

お句地塩田地のよそのめさうだ  
農家の者どもあふぶみ字のよまある  
ちあるよまあるくくくく人ふさくく  
よまあるよまあるけつし句ぬほく  
いうあ〜〜尾麻の本せまを

野

野をさる子の獲てかひあはた

本菜屋の子乃病がちあるといふをくみ  
合あり人懐世態をつくさうといふべー本菜  
屋あふぶみ字も能くも自由あふぶみ字と  
くく馳を子の獲をさうふさうふさう  
ふく〜のり

花の尻ダム美ギまあるのめさうだ

のしーをさうく〜  
腰サカさう

はさ〜いりある附合之流美まあるのめ  
やまの〜といふ人ハま〜といふ流美まあり

人よ何らだたど花よつみ霞よつみ  
何れく人をぬぐもより人何れくも  
どれぬぬや〜して口ハ醒る〜  
〜も何れに霞よまありとらよお向をり  
〜〜ぬや〜つみははのふれ人をぬぐ  
はく

何れも無きこのうち志づらあり  
里見えゆ〜牛の見えふ〜  
人のよ〜向あれ〜  
芙蓉の花はな〜とちれ

吸おハ先出々れ〜さむさむさ  
お向芙蓉の花乃ち〜  
らトと吸お乃向とある〜  
せむさハ西國の名産は芙蓉は名あり  
は〜木つきたれ月の新枝  
若くは〜花よ〜  
ふえち〜  
火とも〜  
ほと〜みち〜

ほ林幽寺趣

隣をかりく車 川らむ  
うき人松 穀垣よりまくらをむ

古ものがぐりれ付ありかぬてとちの思ふべし  
よしを振りまきく思ひ車ふうちのみひろ  
りふろのふゆくふなふ車のまじ思ひぢぢ  
濱の家へ川くくしぬくことなうとせうれと  
りて出むりへたれどとまね思ふはまなれが  
をいよべたふなくていよせむと思ひわづらひて  
松穀垣より入れたるはは垣ハ牝の垣も  
柴の垣ともまきなきをあらたけりかぐも松

穀垣をくらちとほまうと意のせつあはれ  
たりかつうき人といふのふよひびき  
まことゆく公箱の意向よりりてははらふ  
人意のなぶべたふよはらまきむへしあか  
を

また天ふるぬ月の影ぼらけ  
湖水の秋乃比らなれぬとね

けとろれ附合ふあめてはまことふは風乃  
まの面目をまうれたる時なれが解きま  
たそはけりおの向もまよまきぐれなる向ふ

て一向つものくまらてあえまき天のこらよみ  
又字あまふちらら河りかゝるつものた洞子  
をうけく湖水の秋とつけるよれを句のひ  
つりりといふ句えハ湖水の秋ハ比えれおあな  
時と時ふをほいともるくげももぬぐくの空さ  
ろよくたれて湖上ハ有ぬの月乃きまら  
ら比えんのねれふくもらむ画申し  
布子<sup>ヌリ</sup>者<sup>コ</sup> 習子 凡のゆまぬれ  
押合く藤てハ又とつかり松  
布子 給の松がつらなたとろ凡なぞ吹てゆ

ふれのきま—小きき以ハ五人連の旅ちるべ  
—いまぶゆがれなき比松もつくば藤てハ起ねさ  
てハ藤るゆわが—き神之まこころよ布子足習ふ  
以の何らひぬといふもるみおら—  
ツ子むら小蛙まハはゆよまがれ  
藤の芽よりにけ打<sup>ム</sup>ゆりけき  
お句を其のきぐこも思くつけりけ打と  
き—とく藤乃芽より小おこるが蛙をたそれて  
け打ゆりけ—たよけまこころあ—きれど  
それハ庭くろるよさう河れまよたてつくべ

たよりの河を海に流れどたりがれよりのこと  
能はの七尾にぬいほりた  
奥の骨志りづるまでの老をこて

あれも公卿の志よ名高た附合ありあは  
もよた句之能はの七尾乃ぬいほり  
らむ志よふふ玉乃果よしと雪も高くお  
もふくらむされどお海より奥の多きよふな  
れたかくつれり意味をわい何れいふは  
まふともけ句のぬをつくまのあはげれば  
骨をたけれと

立りり屏風をたをれ女子ども  
河原ハ味の實れよ倦した

河原のかさひふ屏風川まりたるを女子ども  
ものけとつきていたをたよまがく見なる  
附合あり

猿サル僧ニキやいきく寺にかへた  
猿サルの猿と世を種る秋の月

あはたがひよたよ附合あり僧も寺ふゆり  
猿サルも家にゆる之句甚高御カムガ慥ガあり  
あり



五二一本生木つける

櫻

口代えふあまよごん思ふこのた

あけのけきささめ

でつちがさあま水とがらり

う懐子もさ遠がとひの素屋を

お向はん花が向きてたぐの薫こがらり

しよ向なりしをさ異のこのもささへたやと

公おまたづぬるに好むのよあらざれもさ

ドたりのよあらざといりれけるよよりて薫

を水ひかへたりと云云を東抄に見えりつ

け合ハたごの向ふなり

さろくと草鞋をゆる月おぼ

蛸をふるひふ起し秋

あれも若首をた附向よて信し西凡依借乃

たふのちりお向はとろくと草鞋をつらりぬ

はよろちの何ぞれ蛸をふるひふ起し草鞋

つらり男とうちかゝる内まゑの秋の二字甚

くら見ゆ

ゆがみく蓋の何りぬ草鞋

よま鹿ふ志づらく居てはうちやふり

内の道具乃或ハゆグと或ハ蓋の何にぬも負一  
内乃ヤとさいうよも臣途の人と負てるの度は  
も負つるの度のいふかとれの度も志りづ  
ぬけおまさとれ凡ねあるべいけ向きお  
の名たらき附合あり

内の道具乃或ハゆグと或ハ蓋の何にぬも負一

お向ハをたく一た人の内まぐふ意一たとえ  
後向格一て親意の情をれと一小所の果を  
いひくちあら不極樂極りく志情多一の壯

いくばく時ぞ老をいうむといへるあらと小所がゆ  
いくばく時ぞ老をいうむといへるあらと小所がゆ  
あらと小所の中ふいひつくた親意さ小所  
あらと小所の中ふいひつくた親意さ小所  
あらと小所の中ふいひつくた親意さ小所

あらと小所の中ふいひつくた親意さ小所

いくばく時ぞ老をいうむといへるあらと小所がゆ  
いくばく時ぞ老をいうむといへるあらと小所がゆ  
いくばく時ぞ老をいうむといへるあらと小所がゆ  
いくばく時ぞ老をいうむといへるあらと小所がゆ  
いくばく時ぞ老をいうむといへるあらと小所がゆ

西たぐふ板敷る春日の所しりりたるや  
ままあぐも目おのぬし名人の句をつらねた  
ろろりやアアささるべうぎ

夕めしにかまきさごとくへば風甚なる

軽の口をよをかいて氣味よた

前白いつもく夕めしよにかまきさごとくしやふ  
て夕方よりささるくたはるしつゆめをい  
いひたる之悔白農家と見てさるは田は  
子出く夕ぐふしゆりくかまきさごとくふとつた  
は之輕の口をよといよよて田はりのもどりのち

しはし

近せハした 殿より のみ

キレツバと人小 味や 方のやをた

禰侯の侍と見ておのちより時と終世せ

よとなく 供者の末はたま之悔白たまに  
入りの侍と見ていつも金襴の大小はたは  
と重洋と異名をつけれはたる之侍ふたは  
はるの之

何をこころよもまはだりりちり

花とちほふハ西念ヶ ねはるく

維新

三十一

係の観想乃辨之世の中ハ何を足徳も深  
だりり之何もろもき深乃やうなるまをに  
ものよといふある乃よりりて西念とつけたは  
たうり後句ハきこえく保まへ之

何思ひ子

オホカミ 狼乃 乃 乃

夕月秋思の萱根此ハゴ廟ヒヤク守る

其とそろ之

控より田の妻やだていさだよき

加 茂の社ハよりきやしそ之

洒落の句之お句をか茂の何より此世ハ

その附合なり

るのやどり乃 ヒヤク無帯 ヒム迅速

に足眠る妻踊るの為此たあはよ

お句無帯迅速といふより係の親おをた

し世の中を何ふとたちけむむよりま

踊るは何とそろもななくくは足眠らむいた

かよごまとの附ぞろ

片 偶小虫ヒム齒ヒムかえく善の目

二階の窓ハたれれたるハ

附ぞろえりりり入りりり窓のたれれ者小

海合

三十一



夏より実のりふうちかめていながさよ  
 持病の虫歯をいして片隈よかごの  
 平いつの居るら二階の窓に皆たちて  
 やりなりとれ向之人情世態は公卿子  
 何らなり  
 て誰りまらむ

箱の葉近のちうらなき風  
 桑心乃たどめよ越る北荒山  
 お白い何ごとちなき向なきを引た  
 何のかそといひ一人の思ふより何りて  
 桑心一先左園のがくを眺むとてたど

めく北荒山を越るはよの雨合之  
 白くは松がまらば

鞍重る三葉駒に秋の来て

ほそあたる何はさや

入込小流傍の涌河の夕暮暮

中よもせいの高き山ぶ

入込の河の中よひより目だちてせい

さが山ぶ一ならむめばま一かりぬ

細きさぢより意つめつ

お思ふ方よおくへとせつら



何よりも膝のうづぐりぬる。

及びこみぬれのをれぬくはいつたり何  
りぬならむまことよき事もたも伝ぬべした  
膝の何ぞろもななく其死骸の上を飛  
まづるは夏よは何らでうつくあるさぶあふ  
りぬあるとのさるるを下ふふくみてたご  
向ふかひらだりたをうして附たる向ふ  
らを向ふとびとよきはとびをあらがれ  
附合ふと一  
死ウキふ日をいつはるし 俵かこち

終に見たきと泣たまひりり

何りのまくなれどうけき附向之  
酒で元た乾あこまたあらむ

双六の目をのぞくまで着りりり

お向おも臺も飲くらして双六よふけりお  
男よても何らむらとての附合之世よ何  
片まの人ありをうして附合ありり

中くふと居ふ居れば登吉な

りが名ハ里乃ぬがりもの

此のれが才をかきつり何々ふありて





中山伏を斬たりとつめりありうの伏

もりのべー

まふおどく私るハれよ何るる

た〜こめて何るる乃の土日

はきまゝえち

芝片芝何に 篠さげゆ

ふびたつ池裡 篠の宿北本後市

糸糸及びん

相國寺牡丹のそ花乃生まふて

椀の蓋とはは 蘇み味の子

おぬさの牡丹見ふた〜ならびておのく

僕ふむりひら〜椀のふ〜とれハ蘇み味の

子〜〜〜斎醗蘇なる料理なりとの附合

むの〜 味ハ 蘇 節 位をば

〜ぬ〜ハ音の 踊のハ泊をまて

お白いうちの〜むり〜が〜りをし〜てハ 蘇市

を泣をらむたらまぬ〜ハれ後白ハ 蘇市

買の何ふれ共どもが音ハ 踊ふ〜ち市のり

いろく乃夜ふちありてた〜むれたるま〜に 蘇

つ〜れ何らぶの〜らぬ〜くも其〜は〜が〜て

ゆりーあらむり

まろけの批<sup>テウ</sup>打<sup>チム</sup>えめをぬねは

汐<sup>シ</sup>内<sup>チ</sup>しりく<sup>ク</sup>敷<sup>キ</sup>星<sup>セイ</sup>川<sup>ケン</sup>の<sup>ノ</sup> 橋<sup>ハシ</sup>

お旬<sup>シユン</sup>の<sup>ノ</sup> 嘘<sup>ウソ</sup>とく<sup>ク</sup>者<sup>モノ</sup>を<sup>ヲ</sup>たち<sup>チ</sup>く<sup>ク</sup>まろけ<sup>ケ</sup>の<sup>ノ</sup> 批<sup>チ</sup>打<sup>チ</sup>つ<sup>ツ</sup>け  
くゆき<sup>ク</sup>し<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup> 俯<sup>フ</sup>そ<sup>ソ</sup>ろ<sup>ロ</sup>の<sup>ノ</sup> 女<sup>メ</sup>人<sup>ニ</sup>も<sup>モ</sup>で<sup>デ</sup>る<sup>ル</sup>星<sup>セイ</sup>川<sup>ケン</sup>の<sup>ノ</sup>  
橋<sup>ハシ</sup>の<sup>ノ</sup> け<sup>ケ</sup>り<sup>リ</sup>く<sup>ク</sup> 秋<sup>アキ</sup>も<sup>モ</sup> ぬ<sup>ヌ</sup>え<sup>エ</sup>た<sup>タ</sup>れ<sup>レ</sup>た<sup>タ</sup>ま<sup>マ</sup>に<sup>ニ</sup> 批<sup>チ</sup>打<sup>チ</sup>け  
ま<sup>マ</sup>る<sup>ル</sup>星<sup>セイ</sup>川<sup>ケン</sup>の<sup>ノ</sup> 汐<sup>シ</sup>内<sup>チ</sup>し<sup>シ</sup>り<sup>リ</sup>く<sup>ク</sup> 敷<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup> 橋<sup>ハシ</sup>に<sup>ニ</sup> 立<sup>タ</sup>つ<sup>ツ</sup>と<sup>ト</sup> 吹<sup>フ</sup>  
ま<sup>マ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup> の<sup>ノ</sup> 時<sup>トキ</sup>を<sup>ヲ</sup> 伺<sup>カ</sup>い<sup>イ</sup>た<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>

塚<sup>ツカ</sup>の<sup>ノ</sup> わ<sup>ワ</sup>ら<sup>ラ</sup>び<sup>ビ</sup>乃<sup>ノ</sup> 巖<sup>イハ</sup>原<sup>ハラ</sup> 石<sup>イシ</sup>原<sup>ハラ</sup>

虚<sup>コ</sup>無<sup>ム</sup>僧<sup>ソウ</sup>の<sup>ノ</sup> 師<sup>シ</sup>み<sup>ミ</sup>め<sup>メ</sup>ぐ<sup>グ</sup>り<sup>リ</sup>何<sup>ナニ</sup>も<sup>モ</sup> 春<sup>ハル</sup>の<sup>ノ</sup> ま<sup>マ</sup>

ほまき<sup>ホマキ</sup>ころ<sup>コ</sup>ろ<sup>ロ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>ら<sup>ラ</sup>ぐ<sup>グ</sup>や<sup>ヤ</sup>ら<sup>ラ</sup>ま<sup>マ</sup>き<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup> 又<sup>マタ</sup>ハ<sup>ハ</sup> 池<sup>イケ</sup>を<sup>ヲ</sup> ぬ<sup>ヌ</sup>り<sup>リ</sup>  
な<sup>ナ</sup>た<sup>タ</sup>が<sup>ガ</sup> や<sup>ヤ</sup>ら<sup>ラ</sup>ま<sup>マ</sup>き<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup> ゆ<sup>ユ</sup>ら<sup>ラ</sup>ぐ<sup>グ</sup>や<sup>ヤ</sup>ら<sup>ラ</sup>ま<sup>マ</sup>き<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup> 又<sup>マタ</sup>ハ<sup>ハ</sup> 池<sup>イケ</sup>を<sup>ヲ</sup> ぬ<sup>ヌ</sup>り<sup>リ</sup>  
が<sup>ガ</sup> ー

朝<sup>アサ</sup>に<sup>ニ</sup> 湯<sup>ユ</sup>に<sup>ニ</sup> 濡<sup>ヌ</sup>れ<sup>レ</sup>て<sup>テ</sup> 湯<sup>ユ</sup>の<sup>ノ</sup> 花<sup>ハナ</sup>を<sup>ヲ</sup> ぬ<sup>ヌ</sup>り<sup>リ</sup>

よ<sup>ヨ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>し<sup>シ</sup> 綱<sup>ツナ</sup>の<sup>ノ</sup> 糸<sup>イト</sup>を<sup>ヲ</sup> ぬ<sup>ヌ</sup>り<sup>リ</sup>

薔<sup>アザミ</sup>の<sup>ノ</sup> 花<sup>ハナ</sup>は<sup>ハ</sup> け<sup>ケ</sup>り<sup>リ</sup>く<sup>ク</sup> 秋<sup>アキ</sup>も<sup>モ</sup> ぬ<sup>ヌ</sup>え<sup>エ</sup>た<sup>タ</sup>れ<sup>レ</sup>た<sup>タ</sup>ま<sup>マ</sup>に<sup>ニ</sup> 批<sup>チ</sup>打<sup>チ</sup>つ<sup>ツ</sup>け  
ま<sup>マ</sup>る<sup>ル</sup>星<sup>セイ</sup>川<sup>ケン</sup>の<sup>ノ</sup> 汐<sup>シ</sup>内<sup>チ</sup>し<sup>シ</sup>り<sup>リ</sup>く<sup>ク</sup> 敷<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup> 橋<sup>ハシ</sup>に<sup>ニ</sup> 立<sup>タ</sup>つ<sup>ツ</sup>と<sup>ト</sup> 吹<sup>フ</sup>  
ま<sup>マ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup> の<sup>ノ</sup> 時<sup>トキ</sup>を<sup>ヲ</sup> 伺<sup>カ</sup>い<sup>イ</sup>た<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>

月<sup>ツキ</sup>に<sup>ニ</sup> 髪<sup>カミ</sup>を<sup>ヲ</sup> 洗<sup>ア</sup>い<sup>イ</sup>て<sup>テ</sup> 湯<sup>ユ</sup>の<sup>ノ</sup> 花<sup>ハナ</sup>を<sup>ヲ</sup> ぬ<sup>ヌ</sup>り<sup>リ</sup>

火<sup>ヒ</sup>と<sup>ト</sup> も<sup>モ</sup> ー ー 石<sup>イシ</sup>原<sup>ハラ</sup>に<sup>ニ</sup> 立<sup>タ</sup>つ<sup>ツ</sup>と<sup>ト</sup> 吹<sup>フ</sup>

あはもたぐ村居のまぐぐ

今もやな草の織を忌連立

なはの巻子 誰もかくおく

あは侍の子乃天者どもが同ト草の織を忌

つれて河津章皇など一ゆく及と見てむよ

よりなはの巻は見ゆるに見つけられどと

からあはなまれ附合之是亦人讀世能

日ハ毒くあは 二月 朔日

あは侍の巻の巻のとれあはく

あはを侍の巻の巻のとれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あはの巻より巻とれあはく

あは

あは

皮<sup>カ</sup>剥<sup>ヒ</sup>の<sup>チ</sup>者<sup>シ</sup>者<sup>シ</sup>て<sup>ク</sup>ら<sup>フ</sup>音<sup>ノ</sup>の<sup>月</sup>

か<sup>ハ</sup>は<sup>リ</sup>り<sup>マ</sup>ま<sup>ク</sup>公<sup>ノ</sup>見<sup>ツ</sup>け<sup>リ</sup>や

比<sup>ヒ</sup>一<sup>ツ</sup>の<sup>門</sup>乃<sup>ハ</sup>柱<sup>ノ</sup>小<sup>ナ</sup>折<sup>レ</sup>去<sup>ル</sup>

定<sup>メ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>ル<sup>バ</sup>登<sup>ル</sup>入<sup>ル</sup> <sup>中</sup>虹<sup>ニ</sup>

二<sup>ツ</sup>白<sup>ク</sup>川<sup>ノ</sup>の<sup>家</sup>之<sup>夕</sup>ハ<sup>門</sup>の<sup>柱</sup>ふ<sup>ち</sup>あ<sup>せ</sup>ぬ

ハ<sup>登</sup>ふ<sup>う</sup>つ<sup>る</sup>か<sup>く</sup>る<sup>位</sup>居<sup>る</sup>こ<sup>ろ</sup>何<sup>や</sup>一<sup>ル</sup>

窮<sup>ク</sup>深<sup>ク</sup>の<sup>お</sup>こ<sup>な</sup>き<sup>定</sup>に<sup>折</sup>折<sup>ル</sup>て

もの<sup>ら</sup>ふ<sup>ち</sup>れ<sup>櫃</sup>の<sup>ら</sup>何<sup>レ</sup>た

お<sup>白</sup>お<sup>こ</sup>な<sup>た</sup>定<sup>ハ</sup>在<sup>ふ</sup>の<sup>何</sup>や<sup>一</sup>げ<sup>あ</sup>る<sup>定</sup>

と<sup>見</sup>て<sup>お</sup>ら<sup>ふ</sup>何<sup>レ</sup>一<sup>櫃</sup>の<sup>た</sup>は<sup>ら</sup>う<sup>き</sup>

位<sup>居</sup>を<sup>つ</sup>け<sup>た</sup>る<sup>こ</sup>

後<sup>も</sup>と<sup>ら</sup>で<sup>は</sup>や<sup>ら</sup>何<sup>レ</sup>り<sup>里</sup>

る<sup>の</sup>音<sup>侍</sup>者<sup>た</sup>ち<sup>の</sup>と<sup>り</sup>が<sup>く</sup>み

お<sup>水</sup>に<sup>ま</sup>ぐ<sup>こ</sup>の<sup>侍</sup>者<sup>の</sup>君<sup>命</sup>を<sup>め</sup>む<sup>り</sup>

て<sup>侍</sup>者<sup>も</sup>も<sup>も</sup>小<sup>旅</sup>小<sup>ね</sup>も<sup>む</sup>し<sup>時</sup>の<sup>た</sup>ま

ぢ<sup>小</sup>親<sup>族</sup>な<sup>ど</sup>か<sup>何</sup>る<sup>人</sup>何<sup>レ</sup>て<sup>ま</sup>の<sup>終</sup>ん

よ<sup>り</sup>お<sup>く</sup>た<sup>ち</sup>く<sup>久</sup>一<sup>ぢ</sup>り<sup>ま</sup>く<sup>其</sup>人<sup>を</sup>を<sup>る</sup>

ね<sup>何</sup>れ<sup>と</sup>か<sup>り</sup>出<sup>て</sup>と<sup>も</sup>小<sup>思</sup>ひ<sup>な</sup>の<sup>お</sup>る<sup>る</sup>

も<sup>あ</sup>く<sup>え</sup>や<sup>門</sup>お<sup>こ</sup>の<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>る<sup>え</sup>侍<sup>者</sup>も<sup>も</sup>の

い<sup>ぢ</sup>と<sup>せ</sup>り<sup>た</sup>つ<sup>る</sup>何<sup>レ</sup>ま<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>侍<sup>者</sup>も<sup>も</sup>ら<sup>う</sup>

おねあぐりわあとの御合あふべー  
るしをいばあ下にぬるく  
お蔵ろろえて 春のよあふ

よあふづらぐあふふをなやふおえたるなり  
いれづらぐのあふもあぐたはあれゆくはま  
首のいれおあ ヨリあふのあ

あふふあ下の句をわーい  
あ句をわああ下の句と見とてかくはつけた  
はうああのをああつけたあさあーあま  
あああ

あはあもあああああああ

あはああああああああ

あはああああああああ

あはああああああああ

あはああああああああ

あはああああああああ

あはああああああああ

あはああああああああ

あはああああああああ

あはああああああああ

あはああああああああ

の歌乃あゝるも何りやをみなへーい  
へたるいほくーたきの形ゆと踏おとほよさ  
僧乃美若れ心あるべーはて附合ハ多量小  
をみなへーと時そのを何いせ整るはとつま  
なまめくとほふをたるり  
月見お坊ー旅のねえシヤウツリ栗  
はまづくふ貝拾ふとる。布代え  
おさきりーりの月見をれどわげと旅のねえ栗  
おてりー之は此バ其扱の候づこひよらま  
くの貝拾ひーあつらむ

豆腐白ひくさるはへきうぬ里の花  
鳥の葉本りて任阿らまて。産  
おの句豆腐さへあきさ花之候句あるの葉言  
りとなりて阿はたる産ふまむ人法采う  
らやむべきの地  
はどろろ空平。身たを毒たれたる  
ふまぐたのむたすりの産産  
ほりれたる附句まきう升どりた二句の言に  
ものかごりもつらなべらありむり。総波  
ふまぐーき母阿りて大よたれられひとりの母

此やひびぐちちあはふたうらうらさへおむく  
てお々の體もくへたえぐなるよかの井  
とかちうらねがえうらうらよえたえむや  
めらむをきわこりのをれをたのみくを  
きたむとさるふよきんぐふあのか波よては母の  
れもてふせあれづとつひふ家の津ふらうれ  
たるちあひれれど母のふれとろよかうりてつ  
ゆもえりさるれども思ひまぐまたあはれゆま  
ちして母ふたうりさうせむやと教たのうたあ  
思ひとがはれどけべたたつきもたうてころ

あうらば日をたうらふたあう後魔の子か  
ふらうらくの井たうりてうふう水けかざり  
なうらうたまぐくとあかたつてうく後魔の  
たのうておらめたるよこそあはたぐゆらりあ  
たたりづれるうたうれどあれよまむ人のねむり  
をけまきとのう

さまよづうらう人よほごうら

田をひきて備うもなた葉ヨステイトつ

よづうらさまを割えうけさるものを居る  
の僧はえりもるうらうからば田地たのど

人ゆつくらもみづうらも田草などとりてたの  
しめは人ふとりなりたる附合之

赤群くちやをさるる朝顔

あるもかづけくひともとのまの

お白うちつどひて瘰癧疹をさるるさほ之

後句は此バ瘰癧疹も大やり農化もよううぬ

まよてあるもかづけたるごと

只ろろくくと脊中くくはる

赤ぬくりぬ人を思ひうぬ

お白口ろろくくと脊中くくはる人を瘰癧ぢ

なる人と見てあるもは思ひて

まつろふ不足なれたる人もちぬてうら

ぬ人ハやごとあまかた奴思ふならむとの

念たあり

ゆふまがれ輝<sup>キ</sup>る<sup>セ</sup>友<sup>ト</sup>とく<sup>ク</sup>立<sup>テ</sup>海<sup>ノ</sup>り

泥うちかひは早て女のたけれ

お白ハゆふがれまぎれ輝る友とく瘰癧

ふハ細及と見て早て女のたけれをつける

たあり

うらみの八鳴ふま守阿ひく





杖むは<sup>ま</sup>き世の中<sup>が</sup>ら<sup>も</sup>ほ<sup>と</sup>きん<sup>の</sup>年  
 く<sup>ら</sup>む人<sup>を</sup>捕<sup>ま</sup>ち<sup>の</sup>ほ<sup>り</sup>め<sup>と</sup>た  
 此<sup>は</sup>不<sup>た</sup>ふ<sup>の</sup>何<sup>も</sup>の<sup>え</sup>り<sup>て</sup>な<sup>き</sup>ま<sup>を</sup>  
 死<sup>出</sup>の<sup>た</sup>を<sup>あ</sup>と<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ば<sup>そ</sup>の<sup>こ</sup>ろ<sup>を</sup>  
 梓<sup>ハ</sup>弓<sup>ヨ</sup>矢<sup>ノ</sup>羽<sup>乃</sup>を<sup>後</sup>を<sup>か</sup>と<sup>り</sup>て  
 射<sup>書</sup>を<sup>よ</sup>免<sup>た</sup>敷<sup>く</sup> 曉<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>年  
 梓<sup>弓</sup>ひ<sup>く</sup>ま<sup>な</sup>ど<sup>の</sup>ま<sup>り</sup>れ<sup>ど</sup>弓<sup>矢</sup>と  
 つ<sup>ぎ</sup>た<sup>る</sup> 何<sup>ハ</sup>何<sup>り</sup>や<sup>な</sup>り<sup>や</sup>の<sup>な</sup>く  
 と<sup>も</sup>依<sup>借</sup>ハ<sup>難</sup>な<sup>た</sup>り<sup>の</sup>お<sup>白</sup>軍<sup>捕</sup>と

見<sup>る</sup>く<sup>学</sup>氏<sup>義</sup>身<sup>な</sup>ど<sup>い</sup>大<sup>の</sup>軍<sup>比</sup>や<sup>と</sup>た  
 之<sup>外</sup>社<sup>は</sup>指<sup>て</sup>思<sup>歎</sup>退<sup>治</sup>の<sup>死</sup>と<sup>を</sup>の<sup>ん</sup>は<sup>ら</sup>  
 ま<sup>之</sup>曉<sup>の</sup>一<sup>字</sup>大<sup>は</sup>ち<sup>ら</sup>ら<sup>何</sup>め<sup>心</sup>な<sup>つ</sup>ん<sup>一</sup>  
 い<sup>之</sup>の<sup>指</sup>を<sup>さ</sup>る<sup>る</sup> 芦<sup>れ</sup>ら<sup>ら</sup>枯  
 梅<sup>よ</sup>出<sup>く</sup>ゆ<sup>れ</sup>や<sup>サ</sup>万<sup>種</sup>ハ<sup>花</sup>の<sup>体</sup>  
 き<sup>と</sup>え<sup>る</sup>な<sup>ま</sup>の<sup>旅</sup>辨<sup>之</sup>  
 ま<sup>ご</sup>難<sup>を</sup>い<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>の</sup>う<sup>つ</sup>ら<sup>く</sup>  
 か<sup>え</sup>ー<sup>一</sup>理<sup>の</sup>侍<sup>や</sup>れ<sup>も</sup>く<sup>た</sup>  
 二<sup>七</sup>英<sup>人</sup>を<sup>揺</sup>ま<sup>る</sup>る  
 麻<sup>の</sup>さ<sup>る</sup>た<sup>え</sup>く<sup>み</sup>よ<sup>さ</sup>ぬ<sup>ま</sup>

冠取もあまきなりめい 泣くゆれ

昔白麻の着たえくすめいハ季もたなく淋き  
まあるべーたぐ秋より後いといふ句を  
後句よてハゆゑありく季なきをみと見した  
おとちた人の気みごとて泣くゆれなりを  
つけり何のゆゑといふハなるれどた  
の勢をおぐめりたよく

足もとん草種ハおけけの草  
よ糸を共たしくとさ ぬ麻の学寮  
ふのこえなり

硯法度と 衣や せうおく

秋のぬ定れ方みくたぐはまむ

昔句硯何れハ艶書<sup>エムシゴ</sup>などやかくと硯も季もくを  
ぬきよー後句ハはおがたたまふおくを  
内むかしくもたなく淋した小秋のぬ内ハあり  
いとせむまぶちなるれせめくハ定の方き  
ぬをきいてなりめともたぐはまむとくおめふ  
人の常情<sup>オコウシ</sup>公卿ひごりあれをける  
高き小水衣 何げハお戸<sup>ハコド</sup>極  
山鳥のわりはく ぬハ志づるなり

お向のお戸極つらめて暮るよ水をわし何げ。  
はま山さる山家の庭と見て山をながつける  
あらうし一旬何となくけたくよた向と

見ぬありの主人ふ恵を志らぬれり

はげと半ふかなくさ、 金華

お向うちくのまれども人志らぬぬがふりて見  
るを主人の志りながら志らぬがふりて見  
るが及之懐向ハさぞ見つけられぬ金華  
さざとをかくしたるあり

息災な子者下くにあり

老たるハお屋よりおふかとはり

お向まよりの下くのりなれど下くともび  
たる人ハたゞ人ならぬと見て引替して附た  
軽係の極へ附ごるハゆを何めて下くの共  
人の赤子あど引つれてやどとあさかてよま  
わびるはよ老人をばゆはれれくはん屋の外ま  
でゆしのがきられてみごとばあどたまりの時下  
く乃子ハまよとやらなりとねんさられしはま  
えひく絆らばかくあらむりまことハはままで  
向をさくしものよあらん

松山

聖三

松山の舞、御碓の咲りしめ  
信乃山灰を下さ 川舟

松山の裾川ふま岸御碓の咲りし中さ  
信乃山灰をすてりは舟之春ささまさふ  
画まふ入信乃の炭とハ画家も及び  
ふささほ 扱く 洗ふ 波よ

魚とふ遊のあゝろを 持さばや  
け附句ハ公卿乃名句中くさふ人ハ贈矣  
さしづくも及びぬとあふいり 若白ふまほ  
扱く 信乃を 洗ふ人ハまことのふ人ハあら

まを 浮世のふにこく おくひ 証のこて 月日  
を 送はしめり 何のあさ人と見てつける  
あめつけごころいさづらく ねきて 一旬のこい  
さるばん 意の及ぶふよあらざ

目のぢりめに 先子 ぶらして やめて  
きゆる ばうりめに 控れさゆる

目ふ 重腫 何は人ハ大に なるの 意ありと  
うや人を おさるふも 船を 舟とすと ぞさんど  
若白ハ かるむつり たるを 思ひて つらめた  
は 句ハ 何ら だた 流より ぬめ 目のうちま

舟

聖三

ふんがものへ何と云ふてはるるの後向ハるの人  
馬子のりて控もきぬるだうりふまふこざりけ  
いぢましきまぐこかゝる人あれはこそ目の  
ちりふふスグーてやらめいとなく  
飛智トチの山乃春 進たや  
弓リドめまぐめえてはむまことま  
お向早春のりたよて世の中ハ春よなるめ  
おれども飛智の山ハ雪いと白くはらよ春の  
まぐもなるしつふ向を弓リドめふ見やめ  
ははあしーとほ附合よや

草カ代ト小地雪コチた 秋のま  
休見 何と云ふの古よ屋此月  
そそ代ト小地雪コチ川まめてゆくふ休見何と  
りの古よ屋此門もまこと又ハまぐぶよそのま  
よ屋がるたたたくゆくもまことあづけ  
あらむ月とつふはまであらるを  
あがとも月とつふ何と云ふ秋とつふまあゆ  
か月とつふも回どるる之まうとのひぐたよて  
秋とも月ともまなぐ  
日やれと 捨もとのあ見

附合  
下  
四十五

くはやうに書てもふやうの筆の海

お向思ひさうくわうや、或之の姿もくわうに  
にせむとてうちやりたれはまをりあふに  
すなくも其のうらみよのふみをかふさ  
がよ筆のふるは、とて附合ころまや  
といつた、一句のふよてふりきこるを  
弓と矢も海づいといけは、持まづき

白紙なれ、出さ、心屋の海ハせめ  
何れも、なれ、附合なり、まぶをさな、た人の  
ふよめ、きれて、弓射るに、その、親乃心、を、く、た

赤子のよ、ま、い、う、ぐ、ならむ、と、心屋の、海ハせめ、ゆ  
け、の、ぞ、た、て、あ、ま、う、ま、み、つ、け、と、ま、之、よ、ま、ま  
と、つ、よ、二、字、あ、ま、く、は、ま、も、は、ぬ、ま、  
は、は、つ、ふ、ま、ま、も、ら、う、あ、め、う、く、は  
娘を、海、ま、く、人、を、海、ハ、せ、ぬ

あ、れ、い、心屋の、附合、ま、く、あ、ま、み、人の、ま、く  
た、ぶ、え、た、存、依、借、之、お、向、の、人、が、ら、ハ、輪、さ、は  
と、見、く、も、ま、く、ま、く、あ、ま、ら、お、ぬ、ま、く、娘  
も、お、向、た、ま、く、人、の、ま、く、海、ハ、せ、ぬ、ま、く、ま、ま、り、て  
ま、ま、つ、ま、の、附合、と

赤子  
白紙

ちうらひをひ回どつらなるは<sup>ホ</sup>基<sup>モ</sup>が  
まじりぬれあらぬら<sup>ハ</sup>月<sup>ツキ</sup>  
お向ふをらぬひきは商人の年<sup>トシ</sup>く<sup>ハ</sup>御  
還<sup>カエ</sup>るいどもとより基<sup>モ</sup>はれぬら<sup>ハ</sup>出<sup>デ</sup>世<sup>セ</sup>も  
せむねを<sup>ト</sup>親<sup>オヤ</sup>なる之<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>向<sup>ム</sup>はた<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>え  
五<sup>イ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>と<sup>ト</sup>つ<sup>ツ</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>  
おけ<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>味<sup>アジ</sup>増<sup>マ</sup>ふ<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>海<sup>ウミ</sup>岩<sup>イワ</sup>  
ひくと<sup>ハ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>出<sup>デ</sup>さ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>由<sup>ユ</sup>代<sup>ト</sup>え<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>こ<sup>ト</sup>  
け<sup>ハ</sup>向<sup>ム</sup>は<sup>ハ</sup>つ<sup>ツ</sup>り<sup>リ</sup>人<sup>ヒト</sup>ふ<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>なる<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>雨<sup>アメ</sup>降<sup>フ</sup>  
つ<sup>ハ</sup>とい<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>あり<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>又<sup>マ</sup>由<sup>ユ</sup>代<sup>ト</sup>え<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>つ<sup>ツ</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>なる<sup>ハ</sup>

と<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>づ<sup>ツ</sup>ぬ<sup>ル</sup>ら<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>由<sup>ユ</sup>代<sup>ト</sup>え<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>  
り<sup>ハ</sup>何<sup>ナニ</sup>ら<sup>ハ</sup>ば<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>卷<sup>マキ</sup>の<sup>ノ</sup>目<sup>メ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>  
あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>べ<sup>ハ</sup>何<sup>ナニ</sup>か<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>  
お<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>依<sup>ヨ</sup>借<sup>カ</sup>を<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>げ<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>海<sup>ウミ</sup>の<sup>ノ</sup>面<sup>オモ</sup>流<sup>ナリ</sup>を<sup>ハ</sup>擇<sup>セ</sup>ぶ<sup>ハ</sup>  
とい<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>合<sup>ア</sup>り<sup>ハ</sup>とい<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>  
とい<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>依<sup>ヨ</sup>借<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>なり<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>  
もの<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>づ<sup>ツ</sup>合<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>依<sup>ヨ</sup>借<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>  
何<sup>ナニ</sup>ら<sup>ハ</sup>ば<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>を<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>こ<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>伸<sup>ノボ</sup>べ<sup>ハ</sup>  
記<sup>キ</sup>を<sup>ハ</sup>べ<sup>ハ</sup>附<sup>ツ</sup>き<sup>ハ</sup>子<sup>コ</sup>を<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>たる<sup>ハ</sup>命<sup>ノチ</sup>と  
子<sup>コ</sup>を<sup>ハ</sup>育<sup>イク</sup>へ<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>持<sup>テ</sup>保<sup>ホ</sup>を<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>は

ヨモ  
スガ  
子



草<sup>コム</sup> 薙<sup>ニク</sup> むらり 藤 萩 名 月

名月ハ人々ハ酒のこものこひしき 萩をがら月  
をながめあろびし 小ひより 尾の指病を押し  
おて月も見げゆし 此の附合ならむや  
ゆへよきおけ下地おと見は  
露を およに 居合 一ぬた  
ゆへよしの秋凡そといふも 何とそるよてゆ  
下はゆのこあろし ちんれども 八旅アとよき  
ちんれあれハ秋凡そといふむすめハひたる  
はべし きてて 句をつらふは けん けさ 要なるべ

附えハる中のはゆま 居合ぬさの 秋くら  
居合ぬくとつゆのこ ちんれを およし ちんれ  
斎之は ぐりりたう ちんれもの 秋が ぐりりたう  
たもの ちんれも ちんれ 名人のよ 居合ぬ  
るし

町 流のつらりと 研く 花の伝  
し ぐ 押 おく 土<sup>ニ</sup>生<sup>グ</sup>の念仏  
ちんれ 小葉の ちんれを 吹通し

はぐめの 句ハ 町流の ちんれ ちんれ ちんれ  
つらりと 研おはし ちんれ ちんれ ちんれ

海

山

の宮にふまゝありたることつけらるる後の向ふな  
精どく薫福をひくちとけふゆくたまふ

ちれ附合の清純

うめ居る海より 朧カイトわづらふ

江戸のちねむりひの真まねがらぬ

お向座をな人のとく 疾がちなはれま

後向うの人江戸よりのかりぬる人を見て

疾何れバ丁ねちのまきまむりひのま

まねがらぬまてけてはなごともけ江戸乃

おがごりまよはまの附合あるべた

まちよもつれどから 印代カス

方くに十敷のゆ乃 陸のまる

京の小家住の何りちなあるべ

桐の木高く 月さゆるく

門めてだまつて海なる西ふは

庭の桐の木は月のはゆるまをひり居

と見て門めてまらくら海なるある安

はをつけり

ひらりゆきとまを まんがくさる

おとすはまの親子 松をく

と貴若のたほしくと重をひらひてぶざれたる事  
をあらへ廿序の親子に馳をいゝなぐりてまき  
かにけりたりたはちとまあるも又人情の附  
合ちりりり

まぐりけ春もまはぬ人  
法不の河沿を送る花はりり  
たぐ何といふりもなれた附合ちるべりり何  
やられたぬめりたはちのま向ハゆえ何りて人  
ましたる人のけ春もほぐまきだは不ちるの  
せよちりりてあゝとの附合ちるべり

どの家も車の方には定を何什  
の奥にくひ何く溪のガイ物イ

お向ハ浦をの片がハ町まぐりどの家も車のの  
定を何けな之は向ハみやこわらめ人ハ浦  
をに滞るゝと鐘物も奥をつらなを  
ひりくちめめづらとめでくひたれどやハ  
ひ何たるとは附合ちるべり

まぐりけ春もまはぬ人  
まぐりけの真乃 早ぬい算 用

お向ハけたりく優艶ちるけりまちるを

後句川橋より世居のりによりあり未を誅  
母子の再用法時分をつかきり

隣へも走らせまて嫁が連れて来て

屏風のかけみ見ゆ。菓子も置

け二句み人懐世態をつくとりとりりやべし  
位のもはなごの隣へも走らせまてつとれと嫁  
をつれてまゐる之後句ハ家なご阿やす  
みて料理なごまゝを隣をふの人の何り  
あらむとけのぞけバ屏風にまりおのけ  
に菓子も置の見ゆるみけてハ嫁こゝろにて阿ゆ

よとけやく内ゆ之公御座色の身よてかきり  
ゆぐをみつけたるけハらふうたのよとて  
依潜ハオ一人懐世態はわくらげハ何れを  
ゆをうたひたひ出するかきり  
妹をよいふくらもらりけ

僧那のもと一先又我やれ

あれも又人懐世態をつきめまてく炭徳の依  
潜ハ世りたつちをさけたけりハ縁子  
もつらけり。妹成思ひの外よよふくらもら  
りてお淡きまねが走るけハ何れも又坊

の借けりくまきかもと一ふかきくろのりそ  
ちとさちとこの附ごろちり

家のちがけく縁を見り  
縁汁わりのものよりよく解りて

ちれも又ぬ乃附合ち里お向ハ大水の何と見て  
縁の尻山ちよふ縁汁たきく皆うちらうま  
ち里ろれ中千一産者れ老人何りて一ちい者り  
よくとびーとつよをーみえいであのげむたふ家  
の縁れとをを見にゆむとつゆとちゆくとのつけ  
合ちよー

雪の縁吹たぐーたは 縁月

ふとむ丸げく物思ひおね

お向は雪の降つてたはは春風の吹ぬれ  
月の縁くとけーはねいとももの思り  
からむとつがは人のさよひくべーやうんちと子  
とむの上お孫もつぐりりちく物思ふと附  
たよ

えつち地ををと一何がらせ

位りれひろふおまー一海ぢふに

ちれも何と空めとほりハちのちとごちよ

何りげふ附たは之強てとらば位るのひろふも  
来し人のあしめりたる。あしめりぬぐゆえに  
まじくまづい人も昔だる。之かはかたかた  
くらゐとよ人のあしめりてとつちけまの念  
仏さへたつておぼえてとへあがらせく飯を  
くはせたりとらふ附合。や  
今月の雪の何つたをけり  
子昔<sup>子</sup>昔<sup>昔</sup>海<sup>海</sup>とほめらぬ小る  
秋もとよもはや雪ふ及んぬをのる性  
どむ<sup>ど</sup>む<sup>む</sup>道<sup>道</sup>道<sup>道</sup>もま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>雪のほへをま<sup>ま</sup>一<sup>一</sup>星

て何そびおのよの附合をたふるハ豊年  
れとへ厚なるをもふくたひ  
堪<sup>堪</sup>忍<sup>忍</sup>ならぬ七夕の夜  
名月のるに何はせさた早をけ  
何まゆものよたふり成堪忍ならぬほどよ  
とつち伝言何り七夕の夜これたつち  
な重附向けぬゆりよてハ草のちまふくた  
むいふもく名月のるに何はせさたのよ  
とろあやり  
あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>へ<sup>へ</sup>キ<sup>キ</sup>き<sup>き</sup>き<sup>き</sup>さ<sup>さ</sup>へ<sup>へ</sup>づ<sup>づ</sup>。

花見ふと女子ぞうめが 連立く

大和政などのもろくは 晒物ゆく河之甘る  
りたき花のさつる 春のけ たせぞうめが  
ふちへもちくく 花見ふちのめたゆくまがこ  
好おの餅たたやちぬ 秋の丸

割本乃安た玉の 花も

二句の眉にたざりたまた世経まこふ解つれ  
なうらけ餅をたやちまらふてあゝ人をいふ士  
の驕者と見てはれど 割本の安た玉の位  
よしとさうめりたよこ

うら玉の干茶 刻むもうらの元  
馬に出ぬ日ハ内づく 意まき子

お向の位を見らるる日 附合のさき無き  
内は飯乃うら玉の月 茶まきむハおちの  
驛ちのさぶくして 馬くくの意を附る  
ものめり

峠小門何秋 五十石元

叶嶋の徳鬼もよをまよる月と花  
小園ちの五十五のうら玉の月 ちの  
て門がまへもたごうふつらりなり 意まきに







やうすぢさうせがうほろほろとひさしく縁の  
のをききたたむらさきなる附合之  
は世乃葉に小孫控ておきしは

何とほつちあつて門のさ付

昔白太もたも教壇の家まで小孫のよと袂け  
まば双方より世の葉乃志どりあひて小孫の  
海らぬほほどたあなが取事しるいといふを  
若の片はと見てるの小孫乃家に信若のまめ  
教が門のひくくれば何とほつちあつて  
は片ま何とまどくあつて小孫の信若を

をた

やうとすぢさう京の道連

有明にたぐほく花乃たぐほひて  
葉のがりたなきをやつてす出しきく  
おきた乃けしは三月申のあま  
も持ふ小孫の仲るるはくと  
くらりとて乃晴教書て

小孫仲るはも持ふあふうはつと信若より  
ろつたてあつてもなれた日氣ありしが  
外小どららめと晴てまをにたりたるを

舟

五十二



邦まづめでたうくひ舞ふぐも何らぬこと  
ゆり名をたみ人なれば水方へたをやらた  
すく之かの陸臺に<sup>ギ</sup>程玉ふくせ秩那の舞  
に舞せしは伴なり

ふ仕舞一糸でまぎは結の魚

豆蔴の癖をあーかぬりり

依の人情は海合なり思ひの外ふ多は舞も  
よくく結の魚も一糸でまぎは男をつね  
ハ豆蔴をどて業ふたさりかちありーが  
ふしき段ゆり思ひ程く高きたふ程半

豆蔴もよくらぬると思ひてあるを何らた  
むるとつくりをまーくゆりこゆこふ  
てきーたる砂を伝へ

中園ゆりは 状の者たた

終日の日ハとて一やうふく舞は

あはれめでた人のあはれとてたへハ大坂河  
のまもちれとてろぐふはまらあよあよ  
ゆもかこゆりもよたりのさひまゆりこ  
あふくゆりくひるあはれ代しの舞は家子ハ  
何らでちうごろゆり候くと終日のくばり

く出世したる人のりも何きも人よもてな  
けいしく又もや中玉よりの物もめでたなり  
をいひあしちるちりかくとたてに附句の茶  
後たがひたれそしちれど立てて附句の茶  
一く見さるる河のあそりたてたて  
茶はむどしき茶の流乃 茶 茶  
山小門何も有ぬの月

板根の才小門ちり又ゆゑの寺よや何らも  
うまよや何らむと月氣は見やわちの附  
合なり

水際ひら敷 濱のふらわー  
見え通は紀三井の流此 嘆きし里  
ふさなる

ふち風の又西ふなり 小ふなり  
わらふ小 緑を ちり ながら  
ちれも名高た奇跡の附合ちり茶の白さち  
風の西ふなり 小ふなり 茶乃よろづあゝるま  
ちたけしきなるに茶の上をさうくさる人  
あくわがの緑をとりてまーや 茶 茶  
ちれはせまどたりとつーむちまををてはれ

母下

の定らば風の吹く人のくもはたぬら  
をとおもひたものこころ疾く時々の哀より  
くはものましく風は万病の長といへるものま  
とわめ之かゝるをふくみくいはよはあらぬ  
どついでよひつ  
喧嘩のほはれもむげとせらぬ

大切な日は二日ある 善者の隣

い句や涙流ぬべー大切な日は二日あるといふ  
母の命はなるをばー善者の隣といふは文字  
をばーいばーむ父母を志くくはの情はみ文字

おめらけし入おの隣をまきくふも尹ぐさ  
たよみたまへるさうろといふ母のつよをさるば  
まばたのれが力をもつーむたらひ喧嘩は  
論をどふかゆふもたち何うぬ善子の情か  
ーむべーなげくべー依借をたりあれりとな  
思ひろか、お白ひびりのふみものまをど  
れさらぬばらむらぬどたきならであの附句  
をまお人や何うおー若葉おきま

善者の隣

善者の隣は近きもの化

けきふうけハ奥州より住家子京への行く出家  
ならむりか小がたなりし子豊と申のりをいひ  
たより

赤野沢新庭の正面

ふらぬ娘のあつろふ志づ矢  
ち小も公卿の名言た附向子て人のゆくは  
向ちゆつたごろぬとやいむ事とやいむ  
たごふはにきのちりし内まづくに思ひみぢれ  
は娘のつひふらとりまづめたはハ奥太の産  
おふひりぬくハ庭の赤野沢ふむむて

たつらむぢあふろのぬをよむとまほし口吐れ

鳥の籠をつらりとねらま松の風

大工づらひの奥にまゝゆれ

お向子於のりしたよて学物をもはけいめ  
内まづく乃小なる籠をつらりとねらま今集  
しつらぬ宿と見てあまふ子於より大工つひ  
乃まゝゆるゆらちほ内まをつけしり

米搗もりふらりとゆれ

から身で市の中をねら合  
けきねころちなりや

月夜の雪もふりある。雪のうら  
志まふふく。殊をわけたる。た  
附ぐろきた日も一日おるふ出く。志まふて  
ろしく。殊をわける。及中のけま  
女<sup>トビ</sup>鳥で。工夫た。たる。思陣  
たれが。り。二。前。によ。ま。た。く。橋。の。番  
お。向。女。を。の。意。日。か。た。ら。ん。た。日。お。た。り。と  
と。と。の。け。も。い。つ。れ。バ。思。陣。の。女。を。で。工。夫。は  
も。と。と。の。り。之。後。向。ろ。の。人。を。橋。さ。と。見。つ。け  
た。る。ハ。何。の。に。お。れ。人。を。お。も。る。を。ふ。く。橋。さ。が。い

をこがほした男よておれをいや。さ。もの。を  
思ひひろたれが。り。ハ。何。の。橋。さ。ど。この。橋。さ。る  
ど。の。可。も。よ。は。め。る。と。た。り。り。人。は。ぬ。こ。り  
ま。え。は。て。ハ。女。を。で。日。お。の。工。夫。を。も。た。る。ら。い  
馬。を。ま。ろ。く。結。ひ。ぬ。お。月。の。夜  
尾。張。で。つ。き。し。も。と。の。名。み。なる  
い。つ。た。の。は。附。ぐ。ろ。き。平  
殺。ら。ら。村。へ。ぬ。け。る。ま。え。及  
吃。と。舞。ぬ。舞。も。男。も。口。さ。い。く  
石。性。家。の。一。村。よ。て。家。も。お。く。田。畑。も。ち。し



金も河川に口きく男之る川が流る  
るふり村へ出居立るるあり  
いせせを梅ふつける 狭いお  
殿こへたる。卯月睦の末  
毎若へ何ならむるがけしき見はる  
—  
いそがへの分を 舟一航る  
射付し 舟おきよは月のくれ  
お向に船つきのちまきて 回屋をくつふ家  
滞りしてぬ。高人のちの津乃用よを仕

おしだい又く舟おきよみくおの津し  
ゆらんおしよは是かへの分を舟一航し  
おはべし 後向にかるふ 射付し 舟おの  
ふえり来たる之にぞめて志ろくぬ入る  
ふいおならむ  
おの會はるはは時れきた  
甚<sup>だい</sup>至<sup>す</sup>る司の同もをりは 侍  
くららくとちるははものをすよる  
かいらがの川に 流れ 朱然  
おの會はるはは時れつてもおの

たあはべしう六何げし愛のたまふてうらに  
んくのたかしくつどいせたるに其心目のるふ  
まぶくひつり侍の居りたる之は此がす  
こくは時がのたもたえづくふなりこれ  
き死との附合之ふりいけはまもか時れは  
むたといふ人の哥の會よつらなりたる。ふた  
ぎろのんくふまふひて主人をまちぬる  
侍のいふあまゝてつけるこころうくといふ  
附くるをり結ドくたぐ武士のた屋おと  
見くても其心司のるも侍のつめぬるふ奥を

の何くりふてくらしくと喜まふ吉のあり酒  
そたまものぞ見くまおれと其心司のるおね  
教侍人あまぐとけりてそゆはまに  
つけり瓦の白たぐりらうとつゆりあ  
みおらをつけたる一辨之はれどあれもさた  
どの若侍いまぐとこのハでかうらのまをた  
たまのちぬるあまろぐりくらうくとたのこさる  
つても瓦のや何らむと思ふ人結をつけた  
たあたやうく見え遠へる顔  
たあふハ川打つける若者の足

撰 徹きぬき 角力たの帯

二の向何れのまゝたれどをうた附句之  
あゝく小人のあひてたうま志の人のや  
まどかたちたがひたのやまてうま志  
けかたたよ彦あにけ打けくま志ま  
とふ志の人のまゝくたのめは法新の人た  
ぐんハ髪たやてあくる之はてこそ  
たははれまよたりの後の角力たの  
たよせく帯たどつくらせく何くあ  
の空もて彦あくハけ打けくま

四 供お弟<sup>ヒタチ</sup>侍<sup>ツケ</sup> 妹も 花とろ  
白 いつとどおのの 飛り

たなやうあゝりたふりあてつけたり  
秋の星乃まどるつる  
まどおもあゝらでや不のぐらく星まひつ  
あゝつあゝはすり嵐山たのの花見  
いとひそやうよあゝらあゝははまハ侍  
まぬりぬもよのまをのとなれがらんこ  
びていきみゆいとよ附合之のちた白た  
こらのやうたまもるがてあゝ花ハま

うりたうしてつどはぬ白おきーろくきた  
ゆははまきまき

手紙のをまつく人の名をとま

本膳がゆればたのしくかーとあり

しをを器ーししををつしを

ための白は附ごうに字のまきけーてたの

く本膳ふかとはゆの時そのうのたきよある

るのをしりて外より用りたよぬのをたこ

せくは城<sup>キヤジ</sup>はたのどあるものもち出て何某

尹といづれの尹ふまきと名をゆふとい附

合たりの後の白はかの本膳乃字の内のうらび

つりしてよろづお大たなはたまをくづーて

殊をおびしーくつてたけるえかつるのまのや

うにるるーくらぬをと見てつけり

お風のきむくと吹 秋半過

まきくうのあると昔は門まぬ

附ごうをうち白きりお風きむくと吹てお

きはまどたお申さふ門あに子をきてゆり

しなるべーさるをつまのきつつけくある

トの家をたなはたきまきなり

馬一疋ふ海老を能ける

小でつちの時うらなほくるまふ人

痛<sup>コゲ</sup>がなけきバ甘房もつ

二の句ほきあつらなり後の句ハ階<sup>ヒ</sup>稽<sup>ヒ</sup>之

小でつちの時うらなはれたる男なるは

家たごもせ甘房をもたきくふ之は

かゝりでもたなく痛もたなくお夜<sup>ヒ</sup>の男なりと

ハ甘房もつ人のことバ形<sup>ヒ</sup>よべ

何の榎くらぬ柱がたつ

二の丸乃光がやぶし重屏風

ふもあがつくほむの穀日

大本の榎よりぬ柱乃たつふハ榎<sup>ヒ</sup>中<sup>ヒ</sup>のほま

見く二の丸ハ重屏<sup>ヒ</sup>引<sup>ヒ</sup>まりく光<sup>ヒ</sup>のやぶ

榎なるは柱をつけり二の丸三の丸なりと

く柱の名取りつり諸侯乃屋敷も何

敷より之のちれ白く大<sup>ヒ</sup>穀<sup>ヒ</sup>なるは丁<sup>ヒ</sup>のり

つろひて柱の掃除など奇<sup>ヒ</sup>麗<sup>ヒ</sup>なる之は侍

の登<sup>ヒ</sup>壇<sup>ヒ</sup>なるはなるはふも何がつてとい

はふし重屏<sup>ヒ</sup>の穀日<sup>ヒ</sup>ふつりて光<sup>ヒ</sup>がやぶ

ふゆかく其の向をいりく附<sup>ヒ</sup>座<sup>ヒ</sup>後<sup>ヒ</sup>白<sup>ヒ</sup>の心



あつろつゆまうへぬせつなほ中へはまぐく子とあ  
向ふいひあらべた。をいろくぬききりあひ  
たるゆゑにさうり

喧嘩の中をむめり川のけ

仕合と矢槍乃舟をのらなむび

附合矢槍のまゆ乃喧嘩と見くほえたる  
へはりか風浪いげしりれは船出さへゆぐといひ  
いや出さしとあぢりいひつのもて喧嘩よなり  
たるをりふいおれあくらぬ日と思ひくつるに  
舟もものらば喧嘩の中をむめりける

が何とよこきけは矢槍の舟は風浪よ摸して  
人もけがらなりあぢりきくはれくは合  
なるものなりとよろこよはま之公のつけ向  
い向くかぎりあぢり情をふくめり

せめくと位子をいぞふつきまえて  
大工屋松屋乃 ぬ教養るこ

内は大工も木屋松屋も木はいろがくは位  
子をいぞふつきまえてる玉在ふの若徳を  
るべ

一里の船も波のさたたる。

山ハ皆蜜柑のこけ黄い成る

け句 蓼太が芭蕉句解に才三ありて 登句  
ふ何らだといひしを伴賀の相みは蜜柑の  
さことしよ葉茂出して 附合のうちれ台なふ  
るきを何うせしにのちる葉たが姉て今ここみ出  
さるよりかけり葉たを君をとりけれどふ  
句いもと附合の句をのこを吾は句もさくらに  
たる之かこころいけの句ふも何りなるや  
三よもさくられりるるは何れにむねおつるを  
さもふ更葉の何らそひをりりり附合る

山松より山松一里のりくよて舟中より見  
やりたはけいたくの後まきまきするさ  
ふ蜜柑とつけるひたの  
先人の風は人死が何

水くきたふ日さの 潮 吟  
あはれさのさきをまぐよつける一併之ぬに  
さるよりのまぬり之太風小宗まぐれば  
びくくした人死ふ日自の葬れのまはまぐ何  
とたのめ

潮に今ハさるよは かいせ記



か<sup>カ</sup>減<sup>ゲ</sup>の甘<sup>カ</sup>走<sup>シ</sup>つりめとのむ

あれも係の人懐世能なりし室のぬまりに  
あろづらひて<sup>キク</sup>積<sup>キ</sup>氣<sup>キ</sup>をたやめの人と見ふ  
かせぬのふれも<sup>ク</sup>け<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>りたる  
がや<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>りたる<sup>ク</sup>あ<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>か<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>身<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>こ  
乃人ハ羊<sup>ク</sup>申<sup>ク</sup>甘<sup>ク</sup>のむ<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>ふ<sup>ク</sup>走<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>あり  
上<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>走<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>ろ<sup>ク</sup>こ<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>内<sup>ク</sup>そ<sup>ク</sup>ふ<sup>ク</sup>墓<sup>ク</sup>主<sup>ク</sup>  
桶<sup>ク</sup>な<sup>ク</sup>入<sup>ク</sup>敷<sup>ク</sup>ち<sup>ク</sup>桶<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>添<sup>ク</sup>  
町<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>ぢ<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>や<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>見<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>が<sup>ク</sup>め<sup>ク</sup>し<sup>ク</sup>上<sup>ク</sup>下<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>上<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>り  
是<sup>ク</sup>こ<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>正<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>人<sup>ク</sup>乃<sup>ク</sup>墓<sup>ク</sup>主<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>内<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>ひ<sup>ク</sup>つ<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>

後向もろこらの坊ふろくろく何ぐ一層の  
水通りよて家くよ桶を出くるがはよ  
て入るはまこ

黒くく高た櫃の本乃本  
月<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>ひ<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>き<sup>ク</sup>門<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>出<sup>ク</sup>ッ<sup>ク</sup>入<sup>ク</sup>ッ<sup>ク</sup>  
お向の櫻の本れ森乃黒くく高たはま  
寺<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>或<sup>ク</sup>は<sup>ク</sup>ち<sup>ク</sup>ふ<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>見<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>大<sup>ク</sup>門<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>た<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>あ<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>だ<sup>ク</sup>て  
小<sup>ク</sup>つ<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>人<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>出<sup>ク</sup>入<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>月<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>花<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>体<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>の  
附<sup>ク</sup>合<sup>ク</sup>ち<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>べ<sup>ク</sup>ー  
所<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>眠<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>付<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>是<sup>ク</sup>醫<sup>ク</sup>者<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>供<sup>ク</sup>

新茶のかげ乃ほつとく東海

醫者に内一をいりて長むなりをしてあり。ま  
ふ僕のみより秘ありぬ。三月末の此屋の心  
をなすべし。うちのはりしも中よた醫者よと  
もふうちかこらひ新茶をどおしくもてなれよ  
ろの白ひねつとまゝくふ之

雪の一面むる降つて

ホ前の志むと 次め 田樂

うきまの降りたりたる夕方はふふの金な  
どかりて志むと。たるには次めの田樂やき

匠のむちあらむ

手拭袂く ねろま牛の首

川ひとつ渡りききたるの耳

お向おあわりののたまえ手拭を頬ががり  
といふものして牛をま奪ゆぐんおねたるを  
手拭をとり。あり後向おて。牛を奪て川を  
わらうははるおね。かへたるはまありたるを  
めよといふておのり。たもこあ

方く一醫者をいさぐる者の月

踊の他法。音もお不えん

か四つこのはくらす寺の者法一とく

ほづめの句乃あるるよていそやりま一の醫者を  
るこふもあつるもりたうゆきまがくこなれい増句  
よしハ養者の月とつふより 誦の他法を知るもの  
なたゆまあるスやまを醫者を引ざりけ  
て誦の他法をきくは法に附りへたる借格  
たうり公の句形やくは格之お句いそや法醫  
者ある。我法なる。醫者にゆりかへたるそら  
たありろの誦を又のちの句あていさの者  
法の誦よりたり

ほしげはものみと氣をやらは、  
生キ小コ息キをやらは。男オかカあり

わくわくし時ハ名言たいろふのそれまきく  
たをのそなりーづつたふどずりり思ひへて  
まこるるのまいつゆたちまーらハまき生の法は  
は者ふがくはてと氣をつくりてたのしめふ人の  
もさうり世の中はくはるかありーまふあれて  
阿まで思ひくたははあはほしげはものみ  
つゆをーまぎく氣をりくるとの附るるなる  
をたつ

濕シツのふた出のかあたる南風

丹波くらはもたうて啼鳥

旅ふふしわづらひくさる園をまゝしへ寝な  
らむ啼鳥といふぞ眼ある。

その季が来れど利よさへせぬ

雪ふ出くちカハライ悪業を退ちらし

ふえな

只五中に月をけえらる。

神唱のひつくりくしくは夜もなれ

其秋の有りはまる中よはたぐ月けえて神唱

の一季きこゆるさきこえぬうふて稲妻のひつくり

しははまきけはたぐ月をけえらるそたぐといふ

字はよくひびくせとめ

志やうりやして季が寝るなる。

奥の院をつくは花をけいのぞ記

たくの院へ十八丁むりよぢはなる途中うりよ

と志やうりやたらしめあろりはうりしがつひみや

みくし氣が軽くなりしといふぢり奥の院は何

となくそらたろろしげなるものあれをづ

くけいのぞくといふ附ぐるちうらむ

附  
三三三

春日のAに産家のか乃つらめと  
かいがくや 河濱くらむ

よく世ををつらしたる向ふり春の白は七  
くしきん姉妹など立ち入り入かりり産家  
のかをいぬに一度ふもわらふるもあらん  
たよりにすめぬなるべし  
いろぐく皆股立をいふび

目つらも何れぞまぬ陣あり  
お白を指傷のま立と見くつけたるこ  
通ひたる櫟林に日がらん

佛の本地をつむふた  
いなるは附ぐるまや

ふるろくと白換出まわとま  
ろぐるまのゆるる 井路

郊外の居れ住徒たるはま之井路にまのハ  
ゆる宿まふろくと白換出まむほくとま  
たなくはべしながよくおをさめく附向ま  
登し

羽二重の赤づる巨にお思ひ  
わらいはくら 沖せしめま

昔白く長くお思ひまね人をたといふり何  
ながちお二まふあゝろなるれどろ水送べた人乃  
はまをいよ之後白いやりり其人よてお思ひいよ  
おけけくけ人おた時「りおどりまね人  
なるばまてお思ひの何る時「なるらけらお  
をたのまむと之おせしめ「おふなるくく何  
るのれもおだのまね人をいよ清之  
おを又ぬきてま水けけの月

白田に何れく山暮乃ッ花

町にブルをどお地ねなくもちておほまお個子

人に見ての附白あり

日笑へだむかろ下を秋の泣

く水づくたおむ才のり

夕風よ蒲生の家も敷れ行

ゆえ何りて才を日笑のゆるりおたおみ  
下をこのちれ白いろのわけをいよあゝろあゝ  
之蒲生れ家といよをい蒲生性の家もたえと  
いよあゝろあゝろあゝろあゝろあゝろあゝろ  
をつけたる他之白きには度はゆるゆえ何りて  
い蒲生の家もぬれくろあゝろあゝろあゝろ

のりをたのむといひやりたるころそ又風よの  
玉ふ字所りがごとそ

花の何よりうち山をぶらつきて

あふれり、野黒谷の陸

前白花の何よりかぎりハルハ六峰峰々ハ东山

と日く小聖山をかけ何よりはま之後白の

はまをまごにつけるはれりは黒谷とひで

たういひふけたりんをつくべ

寒をけしにせ末の下を吹立く

石河たふれハ無縁さの陸

淋しそのかぎりをつくりたる附白之大病の

人の舟物をしと茶葉ト水たりのりなどおし

も冬の日ちれハいとまきし病人のと何らむかく

何らむと葉トおるふ小陸の若うれささゆ

るも物さごとくまきや無常な生るふてはる

ゆトまたりなむはまぐ小思ひわづらよはま

呼かへせどもまけぬ小袿

糸をた隣の朝葉のそ何よて

葉の白をぬちるれりたを見く陸をふの

むつゆトたふたがひに朝葉をのそ何よはま

ありり奥草の小徑を歩みふれり身をとも  
ばつらあきふきぐく浦ぢうくの里とみち

増濱ふりつてきたは音の月

と無任千あま一寺のいぢりひ

前句増濱ふりよもく陣く増ちく煙もた  
えたはふまよひハ音よりをれて月も濃なたす  
ぐく之寺ハろれ何くゆりふて住持のなくれりて後  
ハ下司法沙どもがたのがむくにいぢりひあつた  
とたたく宗のろれたたくはあ  
つたに森む一ふてきたあま一

附ぐろろ花見よゆきて宿のとまはべきなけ  
まばちひれた家に志ひて森へ水ハたたく家  
みくちおまでもちろれたとなりはれども  
吉るそのたたな中ふたぐ一ふて志が下て  
何くろりきふろの上ふて森むと之ゆりた  
旅森なりりり

昨橋のろちりり雨段む嵐穴

馬の糞かくはまいる

前句昨橋の下まぶろちかきこて嵐穴ま  
る之後句馬の糞かくはろの橋となる



季なけれども句中の春々に見ゆがめ  
とハぬもわろし 母の吊

梳りゆに來れどおかし 夷 漢

あはれ引ちがへたる附合之がれに母の年忌の  
とむらひせむとて梳りゆに來居こちらハ夷漢  
ふて客の何るはま之係ゆくりくとも夷漢の  
家ハたも屋もく母の吊を母ハ借家と  
さめるが梳りゆに來れどおかし夷漢  
て梳りゆに來れどおかし母の年忌もけりよ  
りといぬハ何しくらむと心づうひしたるはまふ

とりたしたり

ね何ろびのふけく床とる傍に

る里ろのまき 舟のさぬく

お向ふていたで坊主のね何そびみ出てふけ  
てもどりしきごくをれど後向のそろハ漢乃  
抱女などを置て何さの何けが此船出さむと  
ゆふやねあけてわくしゆりめいくみ船も森  
はまあらむらあふおごやうあらぬ

ゆりもろハきぬ中ハき 碇

いあしほど海ふと空なた月ゆるし

係の人懐世態

摺舟に植ゝるまづく庵アト辛カラ子シ

倭子かきぬ敷宿替の舟

をりした附合なりり舟ひとつ宿替の是  
敷つてて其の上は倭子をかくぬ曲突マカの  
ふ摺舟に植ゝる庵辛子の赤まけ  
はも何るべしお白の庵がうしを庵めて  
つけばたゞのりなるべたふ者替舟と偽た  
るハぬの又ぬ  
考くより一覽まぬり此は花づりの

性やまむる代乃倭

花の作りを考くより一のまぬり  
私何より此石性の苗代時も  
見くは附合よや

けひと谷々栗の山ま貢

七十ふたをよりつる助扶持

お白栗のねたふくく山ま貢ふも栗をた  
てまつるなりり附ごるは國の風俗よて  
守より助扶持をたまふるなりり  
すめハ扶持玉ふる年々くくよるくくぶさまの





子も何れもはまをまてべくもぞもいらそがきまの  
あふれおふふよくひぐくと  
まほいせね<sup>チ</sup>ね<sup>チ</sup>のくは<sup>チ</sup>菫の香  
根のはをいこむおおせん

年よめく身は是程の道がうし  
位く酒のむふふお力あ  
毎益ふまよるひを道がうしといひあひの  
大津馬の道がうしなごりも任は省おあひの  
あろは生は酒は煙のふれは花は春ももはさ

まことふ道がうし一程本ふて人よいやめらた人  
ちをいちよくと身をねと具ねねとたる之後  
台も一過めはやりあろの<sup>ニウク</sup>速懐一て酒のむれ  
はとくあれどあをうくハ具のちあふおのあ一  
る小て酒たうへはハ年久くふつうへてまあ  
おころあよものあめねどちことバ下されたるふ  
あめがくたつとがくしてうことにはあふハは煙  
の道がうし一と思ひつはに年よめたは昔は  
か<sup>チ</sup>は<sup>チ</sup>真<sup>チ</sup>加<sup>チ</sup>な<sup>チ</sup>た<sup>チ</sup>時<sup>チ</sup>あ<sup>チ</sup>あ<sup>チ</sup>ひ<sup>チ</sup>つ<sup>チ</sup>は<sup>チ</sup>よ<sup>チ</sup>と<sup>チ</sup>ほ<sup>チ</sup>ふ<sup>チ</sup>む<sup>チ</sup>せ<sup>チ</sup>び  
く<sup>チ</sup>極<sup>チ</sup>も<sup>チ</sup>え<sup>チ</sup>の<sup>チ</sup>ま<sup>チ</sup>ぬ<sup>チ</sup>れ<sup>チ</sup>ま<sup>チ</sup>ふ<sup>チ</sup>と<sup>チ</sup>め<sup>チ</sup>う<sup>チ</sup>へ<sup>チ</sup>た<sup>チ</sup>る<sup>チ</sup>係<sup>チ</sup>乃

附録  
二

八十四

公府の御手紙之

ごしりくと撰み風の何はなる

稲 盗人の 徳を解やは

お白のまことえはまき之たご世中のやうきとて  
いゆる世何らし一畠盗人をまきりめたごを  
ゆるして解やりたよ協不附あり  
思見れば款ふふきの出来ん  
こぼりくゝまははごしりゆやら  
お白思見ればもくたものさうかたのり水赤  
まひとつめ秋の何らねごしりなごるよて月

を見ればはまぐのりお思ひ出まきのあめとて後  
向ハ何ともお白れさうへ不奈たよたご月よ毛物と  
つけくゝいほしたるえけ松をよゝゝまのふべ  
仮小判る何ははむらめハ解縹み  
仕付まゝ尖を 舞方 の 白の  
田を種は向直江の 稲乃もま

えごめの白いつゆる 樂判とつあまゝむつり  
たご剥きてたは之二の白れ附をる解一がご  
一 後の白ハ舞方結すこつに白直江とび  
うせくふ之さくゝ双方典衣家とつめいりてをさうせ

舞方

舞方

たはあり

風ひやうり平きれづくのま

明<sup>ホウ</sup>葉<sup>ガイ</sup>に角力のあまのついでに

風ひやうりつゆのあまのついでに

藤之はへぬぬともめの草<sup>ナメ</sup>太<sup>ダイ</sup>意<sup>イ</sup>

豆またたしまふ音こはれ

ぬぬともめを年ゆぬりのぬとるは附合を

藤之ふまづく<sup>フク</sup>ぬぬの古名をとあまのつゆ

借之附とるは音のぬともめをぬぬとる

もやと音こはれ何となくまはぬぬのまが

たのしく東風るよしく吹まはれぬぬ

の人乃藤之時ふたぬべし豆とつゆぬぬ

町をらむり

利げやと世<sup>チヨ</sup>らふ志のぬま

夏軍の者ふりくかつぬぬ

たのまきこえがぬぬぬぬぬぬぬぬ

ゆめ老人ふねまの衣をぬぬぬぬぬぬ

まよぬまぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

いひぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

向年ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

向年ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ハ何くまでをもをうくつらばをさへひえきりて  
おしくべしひびくたさるる軍のたよりをちりて  
いへばもけだえ附てろい大蛇の志を志をた  
りりて勇気取下さるる之をたさるるは益  
々強の直岳を宗盛にもらひたる侍も何れ  
見えそしと悔へて入は月月の友  
庵の鏡水をささくは小男盛  
附てろ山里のかられ家にあつてろよく住き  
たはかへくろろしめたる左の二人三人つれ  
だち月見ふ来るとしめたる之何くまで月を

見つて今ハと好座へえりてきりてはまあり  
橋の隙まぐく小男盛の事好く庵ありとらたは  
しは住居ありとべし  
何とくうに徳子とらせむ弱法師  
内 殺害者ありとめふ伏えたるは  
弱法師をいりりて徳子とらせ人ハあふ  
人よ何とでんくもつとたがひは醫者は  
ぶつははちとたはち方ならむとの附合  
ちのいへ  
批行見ゆる。町の入口

附合

六十七





上子回ト

一度ハ江戸を見たりは小商人

ハ三 仙徒とむと 神の門前

お向小商人の常情は世の中思ふまゝ  
強のまゝくらねば江戸でも一かせぎ  
見ると花ものと思ふならむい恨向もろの  
からいふもしてま身せばやと思ひてお向  
まゝのちま

お向のむくむくするの幸

耕<sup>カウ</sup>他<sup>サカ</sup>のりをよくしぬお鬼

むく鳥のめはははお鬼も吹て耕化のり

もろろの時の附こ

尻<sup>ヒ</sup>の<sup>イ</sup>綿<sup>ワタ</sup>を<sup>ニ</sup>世<sup>ヨ</sup>も<sup>ニ</sup>お<sup>ニ</sup>や<sup>ニ</sup>づ<sup>ニ</sup>め

る乃陣日たかたつけゆる

おもろろ付合のお向尻の世もお破る  
人ハ人とあるのりもせざお一おのりも破  
みく一日たて懸然としてぬのりをたのめる  
人と見てたぐいしちの何すめ日記たどかき  
ころよ日おろよハぬをどくりくかきつけて  
おくちま之れれど日記をかくとせば附くるも

古く一句もつゝなうらむをみの降日ぞくめを  
かたつけるといふよしく一句新しくなるか  
はよりをゆく思ふべし  
# 菫を刈 何げなくいふひろき  
功 亦るで何ちららふちらへ 唯れ何ふ  
お向を不のたまと見て 僕を不のむしぎ  
たまをつけり  
くろきをたふ葉の 打小待をけ  
神小かたのくる 葉繁 乃 葉  
なうらむの附向くをききと云葉の打

とハ必待ぬ(も)一たがひなばねむをといひ一をね  
ろろしたるに思ひてちぎり一ふふ行く、ねふ  
くはまで待くれどもつひふ人ハ来ぞてやとぬる  
たまえかたのいづられたはなをばへ一とを  
きききといふと文字甚ちうら何れ悔向ハを  
はなを人の女はうられたる一と一其の繁が  
なうらめまちある葉なつけり  
かむくと有ぬきたをお柱  
# 極 極うけくくふも又らな  
冬のは枝をきめく

ちひはれた顔の身だをよた  
高もゆるりめと内はおはまりて

むつぼぐめでたき内の片まへ高も蟹昌一は  
てまぬ中もよくく女房もよた人のちひはき  
顔ふ今やならむけひてたとなした姿  
ならむ

秋来ても白田の土れびぐれく  
雨さ雀の羽乃たええ掛み幸  
おの白ハ跡暑はたげきけま之附白たぐえの  
時ふら

濡重敷俵をさうんりけどめ  
屋の垣扉てくら砦のちうつきて  
けきあろを

徒搦な者を汁ふか入く  
店より翼千一 家ハつとむ

前白ハ徒搦な者を料理ぐるもなくむげ  
くけふけはか入つとつよあろをを後白ふ  
てはさぐれた徒搦なる料理と一室もちの家  
はよがれて地をふ何のなきはふつけり  
家高の人の家づらりふかはがた

園のりら 暮る人よものいふ  
開のりく 一白 揺く 佐 支 度

あれも世態をつくき付合之翁白ハおちよの  
こやこ一暮る小出する男はたあしく同士の明業  
ちどり京業ありたどし たるついでに尋ねて来  
るれどもおひするもたのいりやとつふとろ  
ふとひて後句よてハそのまことたる男ハ園  
うくハれのいやき者よてもたろれども都ふ  
てハ白まどく揺て艱難カハさるきはあくら来た  
はんとは一おひするもたなく 白揺志まハハ又主

人の供に安んとの付えあらむ  
抱込く 松山 廣た 有ぬや  
何ふ人ぢとふ 奥くさたあり

前句月も明らうに若小松山を抱込く面白  
きりーた之後句破をのけーたと見て何小  
人もく僕人あるはまこ

け 波の上北風の戻らぬ  
腰小 杖さげ 宿乃 三氣ちがひ

前句及申のりーきなるをたどちふ宿とつけ  
く宿ちのこふ何の危たはまをのぐとあり

分おなりしに恋を志し頼  
蓬生ふれもしうげつ伏見  
お白く美し人の泣きわきまもなく恋ふ何あ。  
まがごあるを引替けて今八思ひたなれ伏見  
何よりれ佳佳おたりのめ。人しくたは保のえ  
たられた  
吸おで産家のの字のをたきま  
に後のお坊を又すてま  
大坂何より北町家の内まあるべ  
降まは何らしきまの二まきめ

手のひらふい〜 鞆面ユキ  
さしも名たは化之何らしきまのまき日  
鞆面ユキをたはとよあろふまのひら  
といふまきま日をに何せたるまき  
ハ軽くたてまき之依循ま軽之をまき  
まはる。さるまき  
何のふおともまきね大まき  
宿く〜吐のハ軟喧集体  
お白ハたどまき内のお乃何まきね  
つふろあるまきを懐おまき体のまき

七條よりさき見つけふとソノベ  
ハ船の礼ハスとしく仕込る至  
船の禮乃時ふハづ  
血を思ひつれて續きたる船の船まむ  
くくハ船もなれハ時ふとづ  
あらむや仕込るハしくハにひ  
是代えぬいづほき  
年既ふちひはさやつら  
幸政の礼ハ先をまどくは  
くは星ハ志づらく家ハ  
いふ所合々

いふ所合々  
ハ船の上より白た  
了るに船ハ星をどつめとれ  
琵琶一曲弾終りてハ船の上より白た  
是之たるハ住家女  
妹と姉ハ  
字ハ皆実としてハ  
何れの海へ  
ねる積くまふ出る日の船月  
木子十をくハ掃  
ハ船

おとこの時の登壇をどりつり何れ侍をたの押  
の本ちりねまきしるた附人合ふと何。

首にものを かぶは掃除日

そ花咲て茶なつていれ。夏の山

掃除日こつあゆみ茶を好む居士と見て夏

の山に茶園をつくりたのい。たまをつけ

たはと

穴<sup>キウ</sup>窟<sup>ク</sup>屋<sup>ク</sup>内<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup> 袴<sup>ハカマ</sup>はなるめ

獨<sup>ドク</sup>其<sup>シ</sup>のちひちき家<sup>カ</sup>小<sup>コ</sup>かやだて

おの白を袴<sup>ハカマ</sup>えをぬ人と見<sup>ミ</sup>くちのけきお

のよるとびりつてりかめあは獨<sup>ドク</sup>其<sup>シ</sup>をそ

ら〜家<sup>カ</sup>子<sup>コ</sup>屋<sup>ウ</sup>をぶきをりゆのらあやま

角<sup>カク</sup>力<sup>リキ</sup>にまけ〜いふもぬ

山<sup>ヤマ</sup>うげハ山<sup>ヤマ</sup>ぶ〜村<sup>ムラ</sup>乃<sup>ノ</sup>一<sup>イチ</sup>かは〜

村<sup>ムラ</sup>の茶<sup>チヤ</sup>角<sup>カク</sup>力<sup>リキ</sup>などふたのれとそと人<sup>ヒト</sup>まもひ不<sup>フ</sup>こ

りたるが思<sup>シ</sup>ひの外<sup>ソト</sup>に〜めまけて面目<sup>オモモト</sup>をなは

はな〜の山<sup>ヤマ</sup>ぶ〜村<sup>ムラ</sup>の山<sup>ヤマ</sup>伏<sup>フシ</sup>をらバ〜ほ

をか〜らむ

林<sup>ハヤシ</sup>火<sup>ヒ</sup>け〜は茶<sup>チヤ</sup>ふにゆく鹿<sup>カ</sup>の花<sup>ハナ</sup>

土<sup>ツチ</sup>かきけが〜春<sup>ハル</sup>の風<sup>カゼ</sup>すぢ



前白ハ山ノ岱ノ麓ニシテ廿載トモたニハへま焚  
 りどづハ山ノ入りて葉をとりめく葉ははまたり  
 後白ハ麓の花といふ春風の吹たりてちりた  
 けがまけしきたる春ををいひらひたよ  
 むらひのかのたると魚める  
 一汁ハ代をもてまぬ 極乃粕  
 がは白ハ酒に落ふるく却てつるなちよ  
 は之を白ことよふらぬ白  
 袖イタキのイタキ花イタキ此イタキ極イタキもとの支  
 竹ハキ常キ本キハまうぬふたえて後白之

前白極もとれ先ハ袖のちりて葉をとりめく葉は  
 まと見くくはるハ葉をたこと一葉算ハま  
 うぬれたえり淋ハげなはやくまをつりて  
 志づらくく春に 休むハ代士  
 衣イ豆豆く 旅リきキるル心シ志シづズ ちチのノめ  
 つけぞるるいりちらむ  
 大ハのちりめくする 挟セ小コ路ロ  
 跡アトをヲ此コノ類ル小コ編ヒいハもモ足ツさサぎ  
 お白ハはまり 海ウミ花ハナ小コ路ロの大ハ車クルマもモちりめかぬ  
 はちり後白ハたぐそは切キりてはちのいさか

前白  
 後白  
 竹常本

けふ俗もせむ世もくらくん海もくくもくく

海くとい

海くとい 海くとい 海くとい

大なるのわくめて 田よも 白田よも

ほえちや

さちのぐらふとくま 衣の襟

海もつよふて 能母の位はく

よらうのふりよて せきふ一 説きあふとあるは

まゝアと海附合よや

ぬらひのゆる ね子をまきる僧

冬枯のぬき母をくむ おお西返ひ

寺あどれまがくこよや

間が西毛バ又見たくなは 説の権柄

ともれしやよる 逢坂乃柄

いりぢならむ解一 ねず

あふちかけま おおの西らぶ此

標 萱を目利のうちよ 片付く

上ふ回

かけおの布衣之の親に月片して

百のやいとふたけりぐんをく

冊の

百とところのちふ日もくれむうむたのうけもの  
布衣之の顔に月もあしきりくさも出るたら  
むたやいさきりぐにるくとしふをうこの  
附合之  
かちの舟を先阿がはあり  
山ハのさうだ花の咲あひ  
阿りのまゝ之  
美殿のささるの中乃大りらひ  
ちふらふ称宜も宿ふ下り  
非のちとよや

お平の屋の存見みはるく  
面影ふうちかたしこるるちハ  
懐向も屏風の画之  
露小けけバヤ っさおの役  
子どもが侍る家を阿らそひて  
とも小おのれは家の阿るどたらむおのれ  
たつらむと阿らそひてくははおのれ役を  
もうちけせるどのくははまの附ごろハ表  
みくをぞろまハ伯夷叔齊が侍も阿るべ  
結之ふ下糸の烏帽子をかこぶれ

幕をまぶしハ白い糸をと

ふえな

垣越ふちよつと鹽カミのれりて

善清のうちハ小屋で火を焚

濡れ鹽をかりくるハ善清のハ

くつけくる

彼岸のぬくハ是でかくはる

青サハとふもえつちとこの花

南都春色目前

上下の橋乃岸くる川のちる

田の中板橋乃はちつ

清水橋のりた田の中も水ハ水橋の

はしあふ

枝一本板橋のわき

鳥はる水も神はぬらさ

おちるなだ流ぐるハ枝ひとつを及のり

ぐしもたのそくたざりゆらハ鳥の

ふも海とぶ水むまことハ

屋





